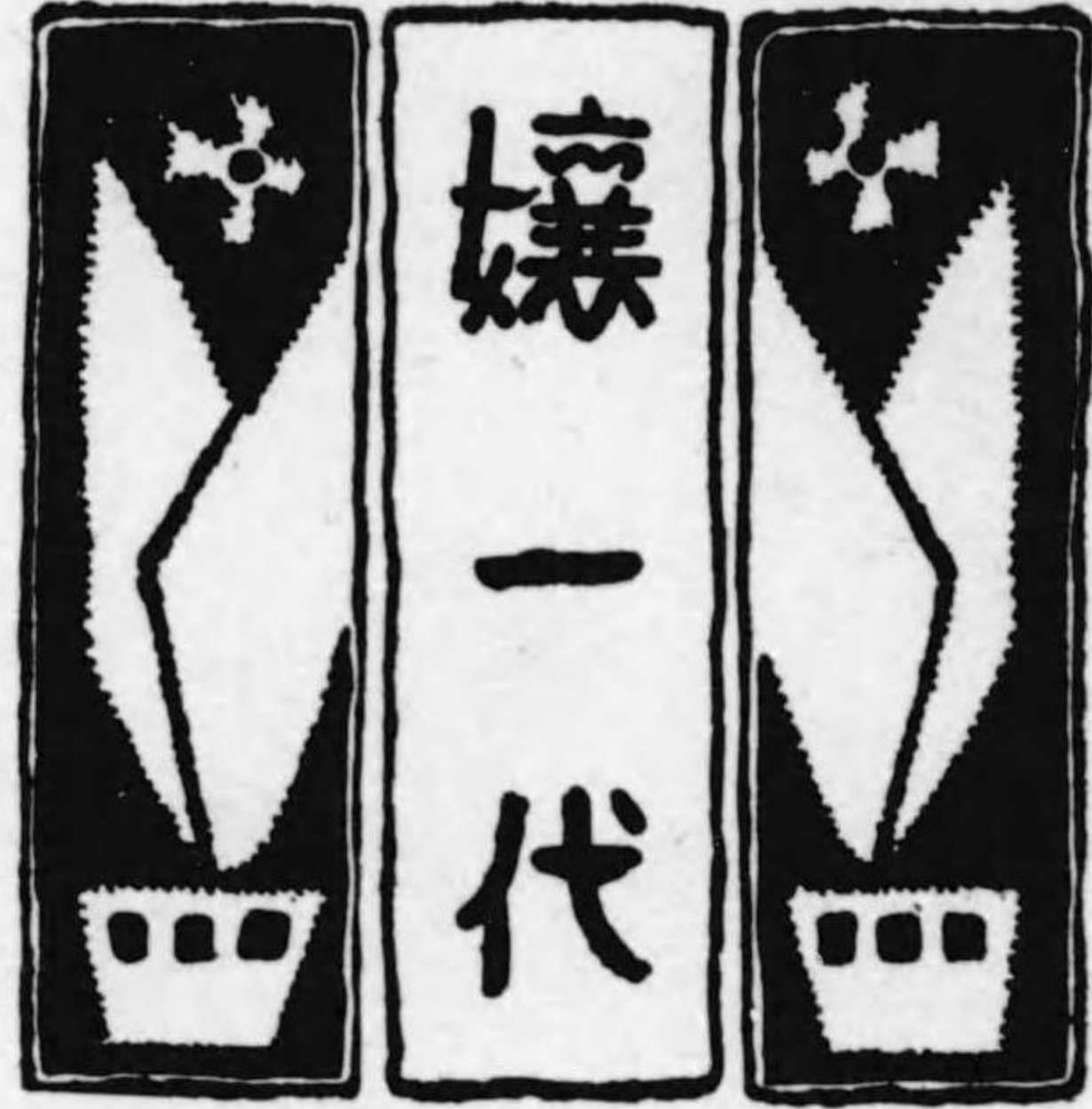




始



特230
632



黒岩染香譜

譯者の序

譯者の序

孰の世、孰の時代にも、其時代第一の豪傑あると同く、又其時代第一の美人あり、數多
 き人物の上に豪傑唯一人秀ると同じく、美人も亦數多き婦人の上に、唯一人抜出て交際社
 會の大達物となり、宛も豪傑が向ふ所に敵なく城を抜き、諸侯を降すが如く、美人又利
 所の諸人の賞仰ぐ所と爲り、唯だ其一點の秋波の爲には、貴公子も心酔て奴隸と爲り、一
 句の優き言葉の爲に政治家も地位を失ひ、豪商も産を破るを辭せず、古の戦國が總て豪傑
 に波動せられし如く、今の交際世界は實に美人に風靡せらる。美人の一度び着たる衣服は
 直に満都の流行と爲り、美人の臨む宴會には貴族紳士我先に列席せんとし、列席して其美
 しき唇より、一言半句の挨拶を受くるを名譽とし、其愛らしき眼に我が顔を見知られぬは

耻とす。

斯の如き美人今有りや無しや、之を英國に求むれば、幽詩畫家波志團墩氏の一女韋倫嬢こそ、實に其美人と云ふ可けれ、嬢が見る人も無き英國の片田舎に成長し、後に及びて一世を風靡する迄に至りしは、宛も豪傑拿翁が地中海の小島に生れ、後歐洲全土を席の如く捲來るに至りしにも比ぶ可く、昔東洋に在りしと聞く、太閤秀吉が名も無き尾張の中村とやらに生れ、日本を俠しとする程に勢ひ得しにも同からんか、去れど豪傑とても其終を好くせざるが多く、拿翁さへ島流に逢しと云へば、彼も一時、是も一時、嬢とても其一代に輝き渡る時あると同じく、又怨恨悲痛、身の置所無き迄に沈淪むこと無からんや、美人の薄命とは誰が言し語なるや知らねど、美人の生涯、醜婦の生涯より猶ほ辛き事の多きは、是非も無き浮世の様にや有らん。

去るにても生涯笑顔を畫し事無しとまでに評さるゝ、大憂鬱の畫家に、如何なれば斯る晴やかなる美人の生れしや、今より數年前英國の王國美術館(ローヤル、アカデミー)に、掛列ねたる畫額の中、天に紫雲の靈鷲きて、其間より最愛はしき美人の顔出で、人待顔に下界を眺め下したる畫の右しは、當時同館に行きし人が今猶ほ忘れ得ざる所なる可し、彼の畫の下には唯だ「待」と云ふ一字を題して有りたるが、是ぞ嬢の父ダントンの畫きし者にて、雲間の顔は早く死したる嬢の母ダントン夫人の肖像なりしと云ふ、雲間の顔は何を待つにや、何を感じてダントン氏が斯る畫を描きしにや、氏の外に知る者無く、孰れの批評家も唯だ古來の畫工が思附き得ぬ、最妙最高の詩境を寫したる者なりと、賞め立るのみなりしが、實は是れ嬢が行方を失ひたる時にして、若し嬢が此畫を見れば、其父が、死したる母と共に嬢を氣遣ひ、家にて只管ら待るゝを知り、父の許に歸り來るならんと思ふ、

唯だ子を愛する一心より盡きたる謎なりしとぞ。去れど此謎畫は、遂に嬢の目にも觸れねば、又何人も解き得ざりし、尤も當時は猶嬢が交際社會の大達者と世に立られぬ前にして、何人もダントン氏に、斯る一女の有る事さへ思ひも寄ざりし時なればなり。韋倫嬢とは嬢が猶ほ世に出ぬ昔の名なり、嬢今は早や嬢にあらず、名字を名乗る夫人なれども、夫人にして終りしか、美人にして終りしか其果の果は、笑か涙か、非常なる美人には非常なる履歴あらん、嬢が猶ほ行方の分らずならざりし以前、嬢が猶ほ其片田舎の父の家に在りし頃の事より、今までの嬢が身を書出さん、讀む人氣長く終りまで讀盡して、此絶世の美人に如何なる履歴あるやを知れ、豪傑の傳記とは又異りたる味も無きに非じ。

嬢一代原著者の書簡

拜啓此頃貴國にて最とも賣高多き某新聞の記者、某氏が伊國の貴族ハビヨ、ロオマナイ氏の著に係る白髮鬼傳を譯述せし由承り候、彼の傳は當國にても出版後猶ほ間も無き事とて、熱心なる讀書家の中にも未だ一讀せざる人多きだに見受られ候ほどなるに、早くも貴國に傳はりて貴國人に愛讀せられ、而も人氣ある新聞紙が譯出するまでに至り候とは、貴國文化の度著しく進歩せるを表する者にて、只管嘆服の外之れ無く候、最早や當國にて有名なる小説其他の書籍大抵は貴國に傳はり、貴國人の思想既に當國人の思想と、大差なきまでに進み居候事と遙かに相考へ申候併し彼の白髮鬼傳は、譯著が如何に譯せられしやは知らざれど、只管に女の薄情を罵りたる者にして、女を偽りの動物と爲し、男子の幸福を

盗み去る怪物と爲し、操も無く徳も無く、唯だ人を欺く事のみを知りて少しも取る所無き者の様に嘸做し附け、十九世紀の婦人をして世間に向ふ顔も無き迄に傷め附たる者に御座候故、譯者も定めし其通り譯せし事と存じ候。婦人は神聖なり、女は造化の最大の美德なり、男子の生涯の慰撫者なり、など云へる諺も有る程なるに、斯る書を著して女を罵るとは誠に不埒千萬の次第にて、當國の婦人社會には既に著者を罵り、彼の書を絶版して充分謝罪せしめんかなど、評議する方も多きやに見受られ候、貴國の譯者は何と云ふ人なるや聞洩し候へども、定めしハビヨ其人と同じく、餘り女には愛せられず、女に對して非常なる遺恨を含み居候人ならんと推量致し候、(涙香曰く讀者よ余は地にも入度き心地す)ハビヨの一類の御人物が、御自分の悔し紛れに暗に、復讐の意を以て如何様に彼の書を譯述せられ候とも、吾等の齒牙に掛るには足らぬ儀なれど、吾等

は御存じの通り、兼て女流の位置を高めんとのみ盡力せる者ゆゑ、ハビヨ的一類の人物が、一人にても半分にても殖來り、女を罵る言葉の一言にても半句にても多くなるは、甚だ深愾に存じ候。幸ひ貴君は當國にも來り吾等の知己にして、又吾等と女流の位置を高めるの目的を共にせる故、貴君の御取次にて、譯者一流の日本人に讀ましめ度き書類多有之、吾等の考へにて、不實不徳は決して女のみに行ふに非ず、男には猶ほ多き事にて之が爲め女を欺き、女の生涯を誤らしむること、決して女が男の生涯を誤らしむるに劣らずと存じ、徳義も作法も辨へぬ下等人種ならば兎も角、紳士とも貴族とも云れ、世の手本と立られる人にして、猶此事あるは許し難き義に候はずや、依て吾等は白髮鬼傳を讀みたる、日本の愛讀者に示し度き書、數種を選び、貴君まで御送り申上げ候。

勿論小説などの如き假設の物語りには之れ無く、總て目下猶ほ人々の口に膾炙する實在の傳記故、貴君其お積りにて然る可く日本人の目に觸れ候様取計らひ下され度候、實は白髮鬼の譯者にも送り度と存せしかど、其名も其住所も存申さず、且は送り届けた所で何うせハビヨ一類の人ならば、目を通す事に非ずと豫想し、貴君の御取計ひに任す事と致候、何分にも宜く願ひ上候謹言

倫敦にて貴君の親友 W T 拜

長崎なる 丸山君

丸山氏より譯者へ

拜啓其後打絶て御無沙汰仕候、陳者此度英國のWT氏より、別紙の手紙と共に幾冊の書籍到着候處、御存じの通り拙者は歸朝以來全く身を實業に委ね、書籍など繙閱する暇も無く、如何に取計ひて宜きや殆ど當惑致し候故、止むなく其書籍數冊と別紙手紙を貴下迄御送り届け候、貴下御一覽の上如何様ともWT氏の意を満足致さしめ候様、御取計らひ被下候は、幸甚に御座候、貴下に於て然る可き思案なくば、別紙別冊とも御手許へ御留置きの上、來春拙者出京の際御返附下され候はば宜しく候、右用事まで勿々

白髮鬼譯者足下

丸山生

譯者より讀者へ

右二通の手紙を読まば茲に譯述する「嬢一代」が如何なる書にして、又何が爲め譯述するやは明かなるべし、余は白髮鬼を譯述して女姓を罵り奉りたる、其罪亡ほしの一端と思ひ、WT氏より送來りし書を一々讀盡したるに、孰れも非常に面白けれど、余の武骨なる筆に合す、止むを得ず其中の最も短き者を撰び「嬢一代」と題し、掲ぐる事と爲せり。「嬢一代」は幽鬱たる美術家「メランコリー・ア、チスト」と綽名を得、目下英國に雙び無き、畫工ダントンの令嬢何某の實傳一部なり、白髮鬼を讀みて眉を顰められたる諸姉諸君、更に之を讀みて嫣然一笑せられなば、譯者の罪、庶幾くは亡びんか。

嬢一代

黒岩涙香譯

代 一 嬢

誠や女は百年の身の上、總て他人に頼る者にて他人と婚禮して所天とし、生涯所天の物となり、憂も辛きも嬉しきも樂きも、一つとして所天の身より來らぬは莫し、所天盛なれば妻共に榮え、所天衰ふれば妻共に落魄す、爾れば婚姻とは、女一代の運を定むる關所にして、女の身に取り是れほど大事なるは莫く、又是ほど氣に掛るは莫し、娘時代は無我夢中とて婚

姻の其日まで少しも氣にせず、唯だ小兒の心にて暮す向も多かれど、小兒の心の中にも何所やら氣に掛る所あり、我身は如何なる所天を持ち如何に生涯を暮すにやと、時に自分で考へ見る事も有らん。

一體何の様な生涯を送るだらう。

思へば楽しくも有り氣遣しくも有り、此樂み、此氣遣ひは十五六の時より、徐ろく心に浮び、十八十九の頃と爲れば時に觸れ、折に觸れて幾度と無く思ひ出し、寢ても覺しても考へ見る事も爲らん、是れ取越しの苦勞性と云ふ者にて、考へたりとて愈々縁談の定まるまで詮もなき次第には有れど、是が女の持前と云ひ、殊には生涯の大事なれば思出すこと無理も無し。

頓て廿歳を越え廿三四歳ともなれば、徐ろく心細き氣のせられ、前に樂しみ七分、氣

遣ひ三分なりしもの果は樂み三分、氣遣七分ともならんか、樂みも氣遣ひも、早きも遅きも、總て其女當人の生れ附にて様々なる可く、茲に英國ブランリーの片山舎に住む、畫工團墩氏の一人嬢、韋倫と云へるは早く其母に別れし丈心細き事の多きや、年十七歳にして世間の嬈達同様に、猶ほ小兒の他愛も無き戯れを好みながらも、時に生殘る其老祖母に向ひ「ネエ祖母さん、私しの後々は何うなりませう」

など氣遣はしけに問ふ事あり。老祖母は其度に、

「お前は猶だ其様な事を云ふ年では無いよ、問ふたとて成る様にしか成らぬから」

と返事せしが、嬢の心には成る様にしか成らぬ、其の「成る様」が何の様ならんと、常に自ら怪みて、人知れず思ひ煩ふ事も有り、時には獨り心の内に我が望みを描き出し、所天には斯様々々の男を持ち、家は云々の所に住む、那の様、斯の様に暮し度しなど、當も無く、

考ふる事すら有り。

十七度目の誕生日より半年も過し頃は、其身が常に遊び暮す、近邊の谷川の岸沿なる楊柳の樹陰にて、流るゝ水の細語聲を聞き、草摘などして戯れながらも、心に其事を思ひ續け、時の移るを忘るゝ程の事も有りしが、或日の事毎もの如く其の岸邊に至り、大魚小魚の樂しげに遊ぶを見ては、我身も終には兒を持ちて斯く親み合て暮す可きか、爾るにても我身の所天は誰れなる可き、住む家は何所なる可きやなど思ひ、枝に囀る鳥の聲を聞きては、未來を告る懐かしき聲かと疑ひ、恍惚として殆ど我身を忘れんとする折しも、夕日の光り、顔を照して暈きに心付き、早や日の暮るに至しかと、驚きて立上る足許に、何やら尋常ならず輝ける品物あり。茂れるは艸、散れるは木の葉、水に濡たる小石の外に、光る物とて無き場所なるにと、嬢は俯向きて拾ひ上るに、訝しや是れ守袋の如く、人々の首に掛く可き寔眞入の

片割にして、宛も小き金時計の蓋かと思ふ、形を爲し、黄金の總體に細工微妙く艸花を刻みたる者なり。何人が遺失し行しにや怪さに堪ざれど、道に落居たる品物を拾ふとは、清き家庭に育ちたる少女の心に、何とやら容し難き氣のせらるゝにて、

「ア、拾はねば好ツたのに」

と云ひ元の通り其の所へ丁寧に捨置きて、後をも見ずに立去らんとせしが、夫も亦心に安からぬ所あり。

「イヤ、後で若し、村の善からぬ小兒でも拾つては」

と呟きて立留れり。

固より高貴の品なれば、其持主の何人にもせよ故と捨たるに有らぬ事は必然にて、夫と自ら心附けば探して茲へ立返る事疑なし、夫までに若し他人が見附て拾ひ去り、遂に落

し主の手に入らぬ事と爲らば、其人の遺憾想ひ遣る可し、我身第一に目に附ながら再び捨置きて立去るは、落主への不親切とは爲ぬにや、我身が拾ひて預り置かば此品充分安全にて、尋ね返る人の手に入る可し、夫を思はず又捨て立去るとは、見ぬ人への義理にあらじと、取つ措つ思案せしも、世間を知らぬ一筋の心には孰れが好きや到底に思案附かず、去れど品の細工の餘りに美しくしさに、斯る艸原へ捨置くは勿體なき様な氣もせられ定め兼ねば、又一足立返り、迷ひ乍ら再び其手に取上げしが、若し其裏に持主の名でも彫みては無きかと、初て其裏を覗し見るに、ア、裏には嬢が生涯の運をも茲に定む可き異様な一物あり。

一物とは持主の名前なるか、否、名前は無くして一葉の小さき寫眞、之に挟みたる儘に存せり、何人の寫眞にや、嬢が顔は宛も生たる人に逢し如く、夕日に照りてバツと赤み、亦忽ちに白くなれり。

寫眞は是れ年廿幾歳と思はる、男子の顔なり、顔も顔、嬢が今まで我が生涯の所天たらん者は、其眼斯くある可し、其眉云々に濃く、其口云々に締り、其鼻筋云々に通りて總體に云々の氣高き所ある可しなど、心に描きたる所と殆ど同じ程の容貌にて、猶ほ夫よりも立優る廉のみ多し。初は何者か我が心の中を讀み、斯る寫眞を作りしにやとまで疑ひしも、中度は我心他人に讀る、筈あること無く、縦や讀まれたりとして夫に合せて此寫眞を作り得る筈なしと心附き、最後には是れ決して今の人間界の人にはあらじ、必ず何時の世にか此世に在り、今は無き人の數に入り、唯だ面影を此寫眞にのみ、留むるの人ならんと思ふに至れり「信と爾よ、此様な男らしい男は、今の世には無いのだに」と嬢は我知らず二度三度呟きたり。

韋倫嬢は拾ひし寫眞の顔をのみ眺め居たるが、見れば見る程其の顔に氣高く、奥ゆかしき所あり、父の描きし畫などに見る、世の美男子など云へる者とは痛く趣きを異にし、彼れは唯だ女の如く美しく、是は眞實に男らしく、戦場に出なば千軍を叱咤して、武名を後に傳ふるも斯様な人なる可く、太平の世に在りては大政治家と仰がれ、交際場裡に入ては紳士の手本と崇めらるゝもの、亦斯様な人なるべしと、自ら尊敬の念を生じ今は勿々捨るにも捨られず、宛も印度の偶像信者が、佛の姿でも拾ひし如く推戴かぬ許りにして、我胸に宛て猶ほ暫しがほど其の所に徘徊せしが、其うちに日は益々暮行くのみなれば、父や老祖母に氣遣はせては成らずと氣付き、其寫眞を持ちしまゝ家に歸れり。

歸りて後も寫眞の事のみ氣に掛り、父や老祖母に告んかとも思へども、何やら羞かしき氣もせられ寧ろ明日又拾ひし所に行かば、落せし人の尋ね來る事も有らん、其時返せば夫までなりと漸くに思ひ定め、其夜は寫眞の姿を夢みながら眠りたるが、翌日は朝飯の終ると共に彼の岸沿の樹の下に至り、幾時間を過せしも尋ね來る人無きより、少し失望の思ひにて歸り來たるが、猶ほ氣掛りに堪ざれば午後に及びて再び行き、坐し剛し艸の上に坐し其寫眞を取出して又もや情々と打眺るに、寫眞の眼は心ありて我顔を見詰むるかと思はれ、其の口は何やら我身に細語かんとするに似たり。

夫も是も我心より産出す妄想なれど、妄想ほど樂き者無く、果は四邊をも打忘れ唯だ我が身、我心のみと爲り、心に描きて心に眺め、心に問ふて心に答へ、

「ア、本統に二人と無い……」

など、知らずく打咥くに至りしが、其聲の嬢が唇より離るゝと同じ時に、嬢が背後の方に當り、バタリと足音の聞えしかば、嬢は忽ちに其樂き妄想の世界より我に返り、ハツと驚き顔赤めて、我知らず其寫眞を衣囊に納めつ、誰なるやと振向見るに、恭々しく脱し帽子を片手に持ち、何か物問ひたけに嬢が背後に立つ一人の紳士あり。其顔こそ擬ひも無く寫眞に撮れる其氣高き、其奥ゆかしき、其男らしき顔なれば、嬢は耳朶までも赤くしたり。定し此世には無き昔の人の姿ならんと思ひし者が、今日の前に立現れ、我が身に辭儀して物までも云はんとするは、意外と云はんか極りの悪き限なれば、嬢が赤らむも無理ならず、紳士は定し一通りの田舎娘ならんを見て、物言掛けし者が、田舎娘にあらで一廉の令嬢たるに、之は仕たりと躊躇ふ如き様子にて言はんとして頓には云はず、唯其の短き間に在りて嬢が心は忙しく戸惑し、我が彼の寫眞を眺めし姿、此人に見られしが、我が咥きし言葉、此

人の耳に入しかと、益々耻しさに込上来るのみ、其中に紳士は痛はら如き調子にて、

「失禮ですが」

と云掛け、少し後の句を考へて

「外に問ふ人が有ませぬ故、失禮ながら貴女にお問申ます」

と云直し、更に又、

「昨日の朝、獵に行く途中此邊で人を待合せ、遺失し物を致しましたが、イヤ詰らぬ寫眞入の毀れたのですけれど」

と殆ど腫物に障る如き用心にて言來れり。嬢は消も入度き心地にて其顔を擧る能はず、紳士は語を嗣ぎ、

「昨夜歸りに此邊を探しましたが見當りません。若しや近邊の人で其様な物を拾たなどと

云ふ噂を、お聞及びには成ませんでしたか」
と充分謙遜の意を込めて問ふにぞ、嬢は答ふる所を知らず、勿論遺失主に返さんと云ふ親切にて拾ひし者ゆゑ、茲にと云ひて差出すは最易き事なれど、昨夜一宵其寫眞を持返り、其寫眞と同じ室に眠りしのみかは、今倩々と打眺めし様を見られ、細語し言葉を聞れしかと思へば、其の最易き事實に最難し、夫も今茲に落て居しと云ふならば未しもなれ、衣囊の底より取出して、今まで肌身に着居たりと見て取らるゝこと實に身を切るゝより辛らし。去ればとて、此儘に濟す可き事にあらねば、ア、何とせん、何と言はん、自ら迫立れば迫立るだけ、我身の異様なる振舞を此人に見らるゝかと、益々我身の不束のみ加はりて唯一言の返事さへ出来らず、徒らにモチ／＼する間に、紳士は返事の無きを「知らず」との返事なりと氣附きしか。

「イヤ、詰らぬ事でお騒がせ申ました、自分の寫眞ですから捨てた所が惜くも無く、是くらの事で貴女のお手を塞いででは、後々まで私しの氣が濟ません」

と作法に少しも缺けし所なき充分の挨拶を述べ、紳士は其儘立去れり。今は無言に居らる可き時に非ずと、嬢は必死の思にて、早や二足三足立去りたる紳士の後より、

「イエ若し」と呼留たり。

三

「イエ若し貴方」呼留る韋倫嬢の聲に應じ、紳士は振向て再び帽子を脱ぎ、
「何か御用ですか」

と云ひながら寄來れり。

嬢は背水の陣を布しとも云ふ可く、最早や逡巡の出來ぬ場合と爲りたれば、顔も燃る程なる羞かしさを思切り、

「今仰有った品物は、私しが拾ひました」

紳士も寧ろ極り悪けに、否寧ろ氣の毒けに、

「エ貴女が」

「ハイ、今に遺失した人が尋ねて來るだらうと思ひ、此通り持て居ます」

と云ひ衣囊の裡より取出して差出せり。唯だ此通り持て居るのみに非ず、今まで倩々と眺め居し事、紳士は知れるや知らざるや、最と嬉しげに顔一面晴渡り、

「イヤ、貴女の衣囊に納められて居ると知れば尋ねては來ぬ所でした、寫眞だけでもお手

に觸るれば身に餘る果報です」

と様子有けの言葉を聞き、嬢は益々極り悪く返事せん聲も出ず、紳士は猶も言續け、

「イヤ尋ねて來たればこそ、斯して貴女のお言葉を聞く事も出來ると云ふ者、此毀れた寫眞入が猶更ら私しの身に貴重な品と爲りました」

と云ひ穩かに嬢の手より受取りて、

「ナニ御覽の通り尋る程の品ではありませんが、實は先年死亡なつた、母の寫眞と變合に組合せた片側ですから、夫で惜いと思たのです」

扱は此人も我身と同じく母を失ふ不幸を経たる身の上なるかと、嬢が心には又一倍の同情を起したり。

「實は昨朝、獵に出る時、其の變合の蝶番が脱れたのか、私の分だけ落ちましたが、急ぐ

折とて直して居る暇も無く、其儘燐寸箱などと共に衣囊の中へ摺込んだのです。爾して茲まで来て友人を待合す爲め、暫し此の柳の樹の下に休み、燐寸箱を取出して煙草など吸ましたから、多分其時に茲へ落した事と思ひ、昨夜歸り道にも此邊を探しましたが、日が暮る後の事ゆゑ確とは分らず今日又探しに來たのです」

と云ひつゝ、一方の衣囊より、同じ寫眞入の片割を取出し手先にて接合せて見せるは、夫と無く、我身が全く此品の持主たるを示さんが爲ならんか。

嬢は初よりの羞しさに眼を垂れ、殆ど此人の顔を見上げ得ぬ程なれど、目に見ぬ者も心には能く見ゆるが愛情の賜とも云ふ可きか、心の底には早や此人の顔深く印し、之を今までの寫眞と比ぶるに、寫眞よりは又一入の活々と凛々しき所あり、殊に其聲其言葉、云ふに云はれぬ餘韻ありて、今まで聞きし人間の聲、人間の言葉よりは、遙に優りし天界の音

樂かと疑はれ、唯だ恍惚として夢の如き心地するのみ紳士は雙合を續合せつゝ、
「イヤ貴女のお手に拾はれたればこそ、斯して早速私しの手に戻つたのです、此御恩は何うして返しませう」
と獨言の如く、又嬢に問掛る如くに云ひつゝも、嬢が顔の餘り美しきに、唯だ嘆賞措く能はずと云ふ如く、嬢が顔を眺めて有り。嬢は其視線の濫かさに我顔を照さるゝ想ひにて、
纒に其の咽喉の底にて、
「イ、エ何う致しまして」と呟くのみ。

其聲の我口より外に出て、紳士の耳に達するや否は知らず。紳士は頓て其寫眞入を衣囊に納め、

「イヤ誠に有難う存じます、孰れお禮には更めてお目に掛りますから」

と云ひ丁寧に一禮して立去らんとせしが、又忽ちに思ひ出せし如く、

「オ、恩人のお名前も伺はず、自分の名さへ名乗りに去る所でした」

と云ひ名刺入より、一枚の名刺を取出して嬢に渡せり。

嬢は此人の名刺だけでも渡さるゝかと思へば、耻しきうちに何とやら嬉しくも有り、受取りて其面を見るに「西富郷、子爵西富春人」の數文字を記せり。嬢は我知らず聲を發し、

「貴方がアノ西富子爵」

と口走り、初て我が端下なき言葉に氣附たれど、是だけ云へば何故に、我身が此名を知れ

るやと云ふ事まで説明せずには置き難く、

「父の畫た繪を、毎も賞美して下さると父が度々申ました」

と補ふに、紳士は少し怪みて、

「エ貴女の父君は畫家ですか、ハテナ、此邊で畫家と云へば有名なる幽齋、イヤ團墩氏の外は知りませんが」

嬢は父を有名と云はるゝ嬉しに、初めて其首を擧げ、

「ハイ私しは波志、團墩の一女です」と答へたり。

紳士は殊の外驚きて、

「オヤ、貴女が團墩氏の令嬢ですか、爾聞けば他人の様な氣はしません、既に昨年も王國美術館で團墩氏の繪を買つて、今も屋敷の居間へ掛けて有る程です、一度は團墩氏に逢つても見度いと思つて居た故、孰れ改めて尋て行きますが、ア、成る程夫で分りました、貴女も美術家の令嬢だけに、美しい天然の有様を愛し、夫ゆる此の川沿で景色を眺めて居たのですネ」
扱は我身が此人の寫眞に見惚れ居たる事、猶此人には知られぬにやと、嬢は漸く安心し、

「ハイ毎日の様に茲へ来て、水や木などを眺めて居ます」
と答ふるに、紳士は此上なき友達を得し如く寛ぎて、暫し此所に足を留め、風景、繪、美術などに就き様々の話を爲し、此日は分れて立去りたり。

四

此日は是にて分れたれど、是よりして韋倫嬢は片時も彼の紳士、彼の子爵、西富春人を忘るゝ能はず、翌日も若や彼の人に逢らうかと、川沿の樹下に至るに、彼れも嬢に逢ふを樂しみてか、嬢より先に來りて有り、初は慇懃なる挨拶より何時しか打解たる話と爲り、四方八方の事を語ふに、彼れの言葉は一として嬢が耳に新しからぬは無く、一として嬢が心に樂からぬは無し。

彼の人猶ほ年若き紳士なるに、如何にして斯く様々の事を知り、四十越たる我父も及ばぬほど話に富るや、如何なれば彼の人の聲は斯までに爽かに、彼の人の容貌も振舞も斯までに男らしきやなど、思へば思ふに従ひて懐かしさの益々募り、翌々日も行き、亦其翌日も行くに、彼れも亦、嬢が彼れに逢ふを歡ぶ如く嬢に逢ふを歡ひ、時を違へず來りて逢ふより、頓て一週間も過し頃は、嬢が心に此人に逢ふの外何の樂みも無きに至り、今まで十有餘年の間、斯る親密の友無くして、何うして長き日々を送られしやと自ら怪む程となりぬ。是ぞ女の生涯に唯一度しか無き眞成の愛情の、嬢が心に兆したる者なれど、嬢自ら夫と知らず、唯だ今までに同じ年頃の友と云ふ者無かりし爲め、偏に親しき者ならんとのみ思へり。

或日の事、春人は嬢と分れんとするに臨み、最と心配けなる顔にて、明日は止み難き用

事あり、都まで行て來る故一日御身に逢ふ能はず、と告たるに、嬢は死分れでもする程の
悲みを催したれど、思直せば一日に行き一日に歸る事ゆる、何の悲む可き謂れも無く、我
父とても年に幾度か都に行き、長き時は一ヶ月の餘も逗留する事ある程なれば、父の留守
より堪難き事無からんと思ひ、夫れならば明後日はと問返す、明後日は必らず此の所に來
らんと云ひしかば、嬢は心を軽くして分れたるが、唯一日も戀人の身には百年なり。嬢は
其夜眠りしも毎もの如くには眠られず、翌朝起出ても何とやら我身に物足らぬ所ある如く
に思はれ、味氣無き事限り無し。

食事を終りて居間に入り、書物など開き見れど文字少しも心に馴染まず、庭に出れば草
木まで、日頃の愛らしき色無きかと思はれ、門に出ても、見る物は總て何年來日々見來り
し儘の姿風情も無く、趣も無く、家は我家に違ひ無けれど、今日に限りて荒果し野原より

猶淋しく、何して斯る所に一日が送らるゝやと疑はるゝのみ、入りて父の居間を伺へば、
父は餘念も無く何やら書きつゝ有り。能く退屈もせず此室に居られた者と、殆ど不審の
想を爲し、立て柱の時計を見れば尙だ朝の九時前なり、暫しがほどは其針を眺め居たれど、
唯だ一分動く間が待遠しく、今日と云ふ日は何時まで経ちても暮ぬほど引延されしやと思
ひ、出つ入つ起つ坐りつするうちに、漸く毎日川沿に出行く刻限とは爲りたれど、彼の人
の來らば行きたりとて何を眺め、何を聞かす、寧ろ忙しき用事でも有らば少しは心も紛れ
んかと、下女の働く勝手に至れば、風情の無き事又一倍なり。皿小鉢は何が爲め、働きもせ
ずに棚の上に重り居るや、流先の瓶や、茶碗は何うして欠伸の出ぬ事にや、見る物一とし
て蒼蠅からぬは無く、又一として不快の種ならぬは莫し、幾度か嘆息し幾度か呻吟して、
殆ど我身を持餘り、斯も遣せ無き浮世ならば、寧ろ死して時の長きを忘るゝに如じとまで

思ひたるが、其うちに漸く太儀なる一日も暮行きたり。

明て其翌日となれば昨日とは何等の相違ぞ、今日は彼の人に逢る、事と、氣も自から勇み立て待遠きうちにも苦にはならず、見る物聞く物悉く晴渡りて、世界は笑顔の満るかと思はれ、心の底より嬉さの込上げ来るを覺ゆ。

斯てあるうち、愈々毎もの刻限と爲りたれば、浮きくとして川邊に至るに、彼の人未だ來らず、何うせし事かと氣遣ひて行きつ戻つするうちに、嬉しや春人の男らしき姿は堤の向ふに立現はれ、嬢の姿を見るよりも懐しさに堪へすと云ふ如く、早足に駈來りたれば、嬢も我を忘れて走り寄り、抱附てホツと息吐き、

「到頭歸て来て下さつた」

と云ふに、春人も最と満足の體にて、

「少しも早く歸り度と充分用事を急ぎましたが、夫でも今迄掛りました、貴女も待遠いと思ひましたか」と問ふ。

「思ひましたにも、昨日まで待遠かつた事は生れてから初めてです」

とて一日の有し様を残らず語るに、春人は聞終りて、

「私しとても其通りで、少しも用事が手に就ませんでした」と云ひ更に「何う云者で、互に是ほど待遠く思のでせう」と問へり。嬢は考ふる迄も無く、

「夫は二人が眞の友達に成た爲です」

「エ、眞の友達同士では是程待遠くは有ません私と貴女とは友達よりも兄妹よりも、猶深く猶親しい間柄と爲て居るのです、ハイ知らず識らず心が夫ほど親密に成たのです」

嬢は春人の云ふ所は皆誠なりと思ふにぞ、充分其意を味ひもせず、

「爾でせうかー」

「爾でせうか」とて貴女は爾は思ひませんか、友達とは幾人も有る者、分れるも有り、其度はほど待遠くては逆も友達を拵へられません、友達の旅する度に、病氣になります」

「夫は爾です」

「爾でせうか？」

「ハイ」

「貴方は此様に待遠ければ、寧ろ死で仕舞かと思つたと、今仰有たでは有りませんか」

「本統に、爾思ましたわ」

「一日でさへ爾でせう、此後若し幾月も別れねば成らぬ様に成れば、貴女は何うして暮し

ます。

一日さへ那れ程なるに、幾月も別れるとは實に心に堪得ざる所なれば、嬢は殆ど色を失ひ、暫し春人の顔を見詰めて、

「其様な事は有ません、幾月も分れるなどと」

「イヤ無いとは云れませんが、貴女も最う年頃で有て見れば、遠からず縁附ねば成りますまい、私しとても既に家督を相續した身の上ゆゑ、何時までも獨身では居られません、親類や世間に面じて妻を迎へる事に、終には成ませうが、爾なれば否應無く、分れねば成らぬでは有りませんか、一月や二月で無く、何年、イヤ生涯分れるかも知れぬと云ふ者でせう」

生涯分れるの一語を聞き、嬢は只悲くなり返事も得せず泣出すに、春人は其の脊を撫で、

「イヤ爾考へると貴女より私しが猶辛い、私しの心では、到底貴女と分れる事は出来ませ

ん」嬢は涙の裡より、

「私しも、私しも」

「夫では生涯、決して分れるに及ばぬ様に二人で夫婦に成うでは有ませんか、貴女と私との情愛は最う友達と云ふでは無く、眞實に夫婦の愛情です、イヤ夫婦の仲にも是ほどの愛情は有ません、夫婦に成て生涯を一緒に暮すより外には、分れぬ工夫は有ませんもの、何うです、私しと夫婦に成ますか」

「ハイ成ます」

成ますの唯一語は、嬢が生涯の宣言なり。

五

「ハイ夫婦になります」と是までは唯だ彼人に分るゝの辛さより、熱心一圖に言來りしも、此言葉の唇を離るゝと共に、忽ち恥しさ込込上て、バツと赤らむ其顔を上げも得せず、春人の胸の邊りに其額を推當て隠すのみ。

春人は唯だ可愛さに堪ぬ如く、其首を抱き、其脊を撫で、

「イヤ爾まで私しに打任せ、私しを生涯の所夫と定めて下さらば、私しは最う死でも厭ひません、ハイ貴女の爲には命も捨ます、夫婦と云ふは男女一代の身の大事で、夫を兩人の心だけで取締るは餘り輕佻みの様ですけれど、愛情の外に夫婦を結ぶ者は有ません、愛情で固めたほど楽しく、堅く、幸ひな夫婦は無く、親の意見や他人の智慧を借た所で、私しの生涯に貴女より良い妻の有る筈なく、又貴女にも私しより良い所夫の有る筈は有ません、エ嬢様、貴女は爾は思ひませんか、思ふなら思ふと唯だ一言返事して、私しを安心させて

下さい、爾は思ひませんか、エ、エ」
と促すに、嬢は羞しさの彌増して、猶も垂れたる首の底にて、

「ハイ」

と一言、蚊の泣く如く返事するのみ。

春人の顔は只だ笑に満渡り、

「夫では嬢様、貴女と私は唯今よりして生涯離れぬ夫婦ですよ、何の様な事が有ても此約束は違へません、好う御座いますか、決して違へませんよ」

と念を推され、嬢は又、

「ハイ」

と答ふ。

春人は全く安心して仕済せし顔附にて、猶一層の熱心を言葉に込め、

「是でヤツと安心しました、二度と貴女に分れるには及ばぬ事と成ましたから、是より私
しの生涯は唯だ貴女の幸福を計るのみです、貴女も生涯今日の此返事を、決して後悔する
事は有ません、不肖ながら西富郷の西富家と云へば、貴族社會で五本の指に折るゝほど、
由緒正しい家筋ですから、西富子爵夫人と云へば、昔から女王の次に立られる程の威勢で
す、貴女が當代の西富子爵夫人に成のです、殊に貴女は子爵など云ふ肩書が無いにしても、
充分上流社會を足下に平服させる程の美しさが備つて居ますから、此美しさで子爵夫人
と爲れば、紳士社會貴夫人社會、皆貴女の奴隷です、貴女は茲十年と出ぬうちに英國朝廷
の第一の飾物と爲り、外國の皇族が來ても、皇妃が來ても、總て貴女が其の接待に向られ
ます、孰れの國の公使でも、貴女の口から一言の挨拶を受けるのを、此上なき名譽とし、西

富子爵夫人から斯云はれたと、貴女の一言は其本國の朝廷へ報告せられ、貴女が一度着いた衣服は、一週間経ぬうち全世界の流行を動します」

口を極めて未來の樂さを描くにぞ、嬢は殆ど嬉さに氣も浮上り、耻しさも半ば忘れて、春人の胸より其額を上げ來り、盜む如くに彼れの顔を見上るに、其男らしき様は又一入の力を現し、此人の雙手に抱れ、雙手の間に保護せらるれば、山嶽前に覆り、大海後に覆へるも、恐るゝに足らずとまでに思はるゝにぞ、只管ら夢の心地にて、

「早く其様に成り度い事」

今は我所天に物言ふ如く呟くに、春人も益々勇み、

「爾ですとも、早く婚禮して斯ならねば了ません」

と云ひ、更に何やら心配けに、

「ですが一つ貴女に斷つて置ねば成ぬ事が有ます、尤も唯だ當分の中ですけど、婚禮は誰にも披露せず置きますよ」

嬢は言葉の心を悟り兼、

「エ、誰にも披露せぬとは？」

「イヤ、誰にも知らさず、極靜にするのです」

「極靜かに？」

「ハイ、誰も知らぬ所で」

「唯だ私の父と貴方の極親しい親類の方が一人つつ立會た丈で？」

春人は少し自裂たけに眉を蹙め、

「イヤ、誰にもと云へば誰にもです、父にも母にも、親類にも、誰にも知さないのです」

「エ、エ、夫は秘密の婚禮では有ませんか？」

「イヤ秘密と云へば何とやら悪事の様子に聞え、残に秘密の婚禮と云へば、悪人が女を欺してする事の様子に、能く小説などには書て有ますが！」

「イエ私しは小説などは知しません、唯だ父や祖母が何でも秘密に事をするは良く無いと、日頃から云ひますから」

「イヤ其の秘密とは秘密が違ひます、唯だ當分の都合が有るから、暫し婚禮を誰にも知らさずに置くと云ふ丈です、婚禮前に知らせるのを婚禮の後に知らせるのです、何で夫が悪事だでせう、何で夫が不正だでせう、後で打明て知らせさへすれば、決して秘密と云ふ者に成る筈なく、貴女は未だ世間を知らぬから少しの事まで大層に思ふて心配しますが、決して其様な者では有ません、一時の都合と云ふ者で、世を渡るには是くらゐの都合をせねば渡られま

せん、先ア少し考へて御覽なさい、唯だ婚禮の披露を少し日延すると云ふ丈の事では有りませんか」

事も無けに言消され、成るほど何の罪も無き唯少しの都合の様にも思はるれど、生れ得たる清浄無垢の心に、父母が家庭の躰にて、幼き頃より日々に入たる善悪の深き區別は、一時目隠をする如く隠さるゝ事ありとも、容易に消失せ可きに非ず、婚禮と云ふ身の大事を何故に父にまで隠さねばならぬにや、呑込み兼ねる所あるにぞ、猶ほ篤と考へながら、

「父に知せても父は止めなど致しません、必ず喜んで承知します」

「イヤ都合と云ふは其様な事で無く」

「では、何の様な都合です」

「イヤ貴女に云ふても、充分には分りますまいか」

「夫でも言ふて聞せて下さい、聞けば又氣が済むかも知れません」
春人は聲を潜め、

「イヤ是を思ふと貴族になるのは否に成ります、第一貴族と云ふ者は、昔から同じ貴族の家から妻を迎へると定めて有るので、夫を破れば勘當です、親類中の相談で私しを捨て仕舞ます、夫故貴女と婚禮するには先づ誰も知らぬ内に夫婦になり、最う切ても切られぬ事に成て、其上で穩かに親類を説き、爾して披露せねば成ませぬ、夫に又貴族の婚禮は、女皇ビクトリヤ陛下の許を得ねばならず、夫も貴族同士の事ならば、兼て陛下へ雙方の身の上に分つて居ますゆゑ、直にも許されますけれど、一方が貴族で無ければ、先づ私しの親類から詳しく其身許を申し上げ、爾して許可を得ねば成しません、其手続きに何年掛るか分りません、夫だから誰にも知らさず、先づ兩人だけで婚禮をして仕舞はうと云ふのです、分り

ましたか」

成るほど分りは分りたれど、爾ればと云ひ、此大事が何うして父に知さずに置かる可き、春人の言葉を聞くに従ひ、嬢の赤らみ居たる顔は次第々々に白くなり、其眼に愛らしき光は消え、涙の湛へ來るかと思はる。

春人は又迫寄り、

「是だから、何うしても私しの云ふ通りする外は有ますまい」

「だって、父に知さぬと云ふ譯には！」

「何う有ても？」

「ハイ、唯だ父だけに知らさせて下さいまし」

春人は斷乎として、

「了ません、父だけに知らせるのは萬人に知らせるも同じ事です」

六

父に知せて成らぬと云ふ春人の斷乎たる言葉に、嬢は唯だ泣くのみなりしが、頓て春人は我が言葉の餘り強過しに氣附きしか、再び嬢を慰むる如く其手を取り、

「イヤ父に知さずに婚禮するは、實に貴女の身に辛いでせう、私しとても親類に相談せず、女皇に許を得ずして婚禮するのは實に辛いのです、併し其外には到底婚禮の道が無いから止を得ません、語り秘密に婚禮するか、秘密が否さに是切り生涯分れて仕舞ふか、其二つの一つです、サア何うです、是ぎり分れて仕舞ませうか」

嬢は涙の底より、

「是れぎり別れる事が出来る程なら、泣も何にも致しません」

「夫では婚禮の外有ません」

「でも斯して毎日逢て居て、其内に貴方の云ふ手續は出来ませんか」

「夫が出来程なら決して秘密の婚禮など言張ません、分れるか秘密に婚禮するか、全く其二より方に致方が無いのです、斯云つても未だ充分貴女には其譯が分りますまいが」

「イエ譯は能く分つて居ます」

「イヤ定めし無理な事を云ふ男だとお思でせうが、妻と云ひ、夫と云ふは互に心を任せ合ふ間柄ですから、私しが斯せば成ぬと云へば、貴女は成る程爾せば成らぬ譯柄が、私しの心に有る事を信じ、私しの言葉に従つて呉ねば成ません、一々其譯を聞き、充分に呑込込上で無ければ従はれぬと云ふ様では、夫こそ所天を不安心の男と疑ふ様な者、少しで

も不安心と思つて、何うして生涯の夫婦と爲れませう」

「イエ私しは決して貴方を不安心とは思はず、夫ほどに仰有るには、必ず充分の仔細がある事だと思つて居ます」

「夫では無言で私しの言葉にお従ひ成い、何にも問はず、何にも云ず、安心して私しに任せなさい、決して貴女に後悔はさせませんから、エ嬢様、是ほど云ても未だ私しの云ふ事に安心が出来ませんか」

「アレ爾では有ませんが、父に隠すは何とやら罪の様で」

「エ罪、其様な事が有ますものか、第一貴女は、私しが貴女に罪を犯させる様な、其様な邪見な男だと思ひですか」

「アレ爾では有ませんが、今まで何事でも父に隠した事が有ませんから」

「夫は今まで父より大切な人が無たからです、眞實清い愛情で此男を所天だと定むれば、父よりも猶大事、其人の爲には父に隠す事も無くては成ません、又私しの身に取ても貴女が愈々妻と爲れば、父母より猶ほ貴女が大事、貴女の爲には場合に由り、父母に隠す様な辛い義理も貴女へ立てます、所天は妻ほど大事な者は無いと思ひ、妻は又所天より大事な者は無いと思つて、互に辛い事も忍び合ひ實意を盡し合ふから、夫ゆゑ夫婦は一體と云ふでは有ませんか、父が大事だから所天の意には従はれぬ、母が大事だから妻の願ひは聞かれぬと云ふ様では、夫婦では無く他人です、私しは貴女と其様な水臭い夫婦に成度いと云ふのでは有ません、親の爲にも親類の爲にも、義理の爲にも生涯分れぬ、本統の夫婦に成度いと云ふのです、夫も私しの願ひが、太した無理な事ならば兎も角、何も父を殺せとか、父を苦めるとか、父に不孝をしるとか云ふので無く、唯だ婚禮の濟で、私しが愈々貴女の所天

だと世間へ名乗れる時まで、待て呉れと云ふ丈では有ませんか、誰に聞せても決して無理とは云ひません」

熱心面に現れて、宛も囁で唯める如く説來るにぞ、嬢は聞くに従ひて少しづつ心其方に向ひ行けども、猶ほ何とやら腑に落ちぬ所あり、兎角の返事も爲し兼ねるに、春人は少し氣色を損じたる様子にて、

「イヤ私しの考へでは、愛と云ふ者は互に苦い事を忍び合ひ、爾して實意を盡すから、夫で尙い者だと思て居ました、辛い事を忍べば忍ぶだけ、益々愛情が深くなるのです、古への貞女は、所天の爲に命まで捨てました」

「ハイ私しも、貴方が命を捨てると仰有れば命を捨てます」

「命は捨てるが、婚禮の披露を少し延して呉れと云ふ、其願ひには従はれぬと仰有るので

すか、自分の身を苦めるが愛の證據、是くらゐの願ひさへ聞て下さらねば、貴女の愛は何所に證據が有ませう、尤も今時の女に、昔の貞女と同じ様にせよと云ふのは、少し無理かも知れませぬが、貴女ばかりは昔の貞女に決して劣らぬ忍耐の有る方だらうと、私は思て居ました、自分の心ばかり言張て、私しの初ての願ひを跳附る様な其様な方とは思ひません、是でも猶ほ私しの願ひが聞かれぬと仰有れば、私は唯だ失望してお分れに致すばかりです」と果は悄然として打萎れ、早や其所を立去らんとする如くに身構ゆるにぞ、嬢は茲に至りて最早や逆ふ力なく、成る程忍び難き事を忍び、堪へ難き事を堪へて、男に實意を現すが貞女の本分と云ふ者かと、全く春人の言葉に酔ひ、

「では貴方の仰有る通りに仕ます、ですが婚禮を父に隠すが、罪には成らぬ者でせうか」
「何で罪に成ませう、幸福な夫婦と爲り、其上で父君に知せれば父君も必ず歡びます、所

天たる者の言葉に負き、父を歡ばせる其道を失ふこそ、女に許し難い罪と云ふ者で、父に對しても不孝になります」

茲に至りて、嬢が今まで取つ惜つせし思案も全く消え、唯だ一筋に是が貞女の道とのみ思ひ詰るに至りしかば、

「夫では最う、貴方の仰有る通りに致します」

と答へたり、知らず唯此一言、嬢が身に如何の禍福を加へ來るや。

七

世間を知らぬ韋倫嬢の心にて貞女ほど世に貴き者は無し、日頃父の言葉にも、汝の母は世に珍しき貞女なりし、汝も後々唯だ貞女になる事をのみ勉めよと云はれたること、幾度なる

を知らず、辛きを堪へて爲し難きを爲し、以て所天の意に従ふが貞女と聞きては最早や何をか厭はんや、父にも隠さん、世間にも隠さん、隠して只管に春人の意に従ひ、天晴れ貞女の一人に數へられん者と思へば、今まで氣掛りに堪ざりし事も氣に掛らず、辛かりし事も辛からず、猶は此上に百倍辛き事にも、溜息一つ吐ずして仕果せんと決心せしは、世にも健氣の至りなれど、悲しや嬢が心は底の底まで欺き盡され、善と惡との境目を見違へたるなり。

春人は猶ほ嬢に此決心を深くせしめん者とか、感心の色を表に粧ひ、

「イヤ女の身に取り貞女と云はれる程の名譽は又と有ません、何の女でも貞女に成たいと思ふけれど、貞女になるには氣に染まぬ事もせねばならず、憂き艱難も侵さねばならず、夫が辛さに大抵の女は、貞女と云るゝ迄に行かずして終ります」と云ひ更に又、

「其代り詰らぬ慾や詰らぬ樂みに耽けるとは違ひ、我身は此様な辛い想ひを堪へ、他人に眞似の出来ぬ苦みをしてまでも貞女に成ると、斯思へば其辛さが却て楽しく、辛ければ辛い丈け益々辛抱が仕易くなります」

など云ひ只管、嬢の心を勵すにぞ、嬢は愈々其決心を堅くしつ、

「夫では貴女の言葉に従ひ、是より何うすれば好いのです」

「イヤ何うせ此土地で婚禮は出来ませんから、倫敦へ行きますせう」

とて是より父には、或人と婚禮する爲め暫く他郷に行く可ければ少も御心配に及ばず、其うちに立派なる貴夫人と爲りて歸り来る旨の手紙を認め、明昨夜の未だ明けぬうちに此所へ忍び来らば、直ちに誰にも見られぬ様倫敦へ連行き遣らんなど、駈落の手筈を事細かに語り出しにぞ、嬢は事の益々容易ならぬに一たびは驚きたれど、今より既に驚く様では到底も貞

女には六し、など、言葉最と巧みに説付られ、濟まぬくと思ふ心を胸の中にて押潰し、終に其意に従ふ事となりしは、是非も無き次第と云ふ可し。

此夜は家に歸りて後、一間に籠り、春人より言はれし通り父に宛たる二通の訛書を認め、之を我居間なる机の引出に納め置きて寢に就きしが、心に掛るのみにして眠らんとするも眠られず、我が忍去り、後に父と祖母とが如何ほどに驚くならんと思は、一層春人との約束を破らんかと思ふ事も度々なれど、彼の人と分れて何うして生涯を送らる可き、殊には後西富子爵夫人と云はれて、交際場裡の女王とまで立てらるゝ榮華を思へば、嬉さも嬉しさなり、是が貞女の道と云ふ勵みの心も胸に在り、父が一時の驚きは他日出世して歸り来る、其時の喜びにて消ゆるならんなど、彼是と考へ廻し漸く最後の決心を定めし時、曉方の四時の時計を聞きたれば、其儘窃に起出で勝手に馴れし出口の戸を開け、誰にも知られず忍び出

しが、猶ほ春人と約束の時間には早ければ、先づ茲より遠くも有らぬ母の死骸を葬りある墓場に至り、生たる人に物言ふ如く、事の次第を母の墓に向ひて語り、生たる父には隠したれど死したる母に打明たれば、縦し我が振舞に罪ありとも其罪は輕からんなど、獨り自ら慰めて、頓て約束の堤に至れば春人既に茲に在り、手を引合ひて停車場に行き、一番汽車にて倫敦に向ひたり。

汽車は勿論上等室にして、中に乗居る三四の紳士、孰れも春人を知れると見え、子爵々と恭ふ様子に、嬢は早や交際場裡の入口まで登りし如き心地して、昨夜よりの心配も大方忘れ、窓を隔て、目新しき景色など眺むるうち、汽車は漸く倫敦に着き、其身は最と立派なる旅館へと連行かれたり。

春人は嬢に向ひ、婚禮は勿論人知れず行ふ故寺院にて其式を擧ぐる能はず、長老の私宅に

行て唯だ儀式だけを済し、其上にて直ちに蜜月の旅に上らんと云ひ、暫しが程嬢を其旅館に残し置き、自分は買物にとて出行きしが良ありて一襲の衣服を買來り、之を嬢に纏はしめしにぞ、嬢は纏ひしよ、鏡に向ひて眺むるに、衣類は嬢が見し事も無き立派なる織物に、數多の飾物さへ附屬し有りて、我姿見違へるほど麗しくなりたれば、嬢は殆ど嬉しさに堪はず、何事も唯だ春人が言ふが儘に任せ置くに、春人は嬢が手を取り、サア婚禮の場所にと云ひ再び宿を立出たり。

外には早や一輛の馬車ありて、嬢と春人を載せるが否や、孰れとも方角知らぬ方に向ひて轆り出で、凡そ一時間ほどを経て市街を離れ、田舎びたる道に入り、狭き河莊かとも思はるる家の前に留りたり。

茲は何處と嬢が猶ほ問はぬうち春人は嬢に向ひ、是が或寺院の長老の住居なりと云ひ、共

に降りて内に入れば、兼て待設け居たるにや、書齋とも云ふ可き一室に通されたり。斯る靜なる所にて、何の華美なる儀式も無く婚禮を済すかと思へば、何とやら心細き氣もせらるれど、夫等の事は今來りし馬車の内にて、春人に充分説含められし事なれば今更ら敢て驚かず、婚禮済めば蜜月に如何なる所に旅するにやなど、後々の樂さを夢の如く我心に畫くうち、長老は入來れり。

見れば春人より年僅か二三歳も上ならんかと、見受らるゝ同じ程の若紳士にして、顔に險しき所あり、神に仕ふる長老ぞとは受取り難き所も有れど、長老ならぬ者を長老と云ふ筈無ければ、嬢は強て自ら安心し其儀式を待居たり。

八

婚禮の儀式とて實に簡略なる者にして、唯だ彼の怪けなる長老は、嬢と春人に姓名及び生れ年月を聞きて帳面に書記し、春人の持來りし固めの指環を嬢の指に環させて、其上にて通例婚禮の時に言渡す如き儀式の言葉を言渡せしに過ず、是が男女の一生を結び附る儀式かと思へば、殆ど飽氣なき程なれども、嬢は是でも生涯の大事ぞと深く心に感じたれば、身は早や西富郷の西富子爵夫人に成就せたる心地し、此矮小き長老の住居を立派なる寺院の如く心得、長老其人の顔を氷翁の如く思ひて、後々まで忘れざりき。

是より凡一週間を経たる頃、佛國の都巴里府の某旅館に、英人瀬川氏夫婦と稱する男女一組の旅人あり。所夫瀬川氏の立派なるは巴里の貴紳社會にも多く類を見ぬ程なるに加へて、其若き妻瀬川夫人の美しき事は又驚く可き許にして、殊に夫妻とも金錢に厭目なき贅澤の暮しを爲し、日々の如く二頭立の新しき馬車に乗り公園に運動し、或は名所を見に行くな

ど、定し英國屈指の金満家が蜜月の旅に來りし者ならんと、誰が目にも知らるゝ程ゆるゝ瀬川夫妻の名は早くも満部の評判と爲り、少しの事を通傳として近附を求むる人も多く、通傳より通傳にて歴々の家に在る夜會にまで招かるゝ事と爲り、至る所に瀬川夫人は巴里府の美人をして顔色無からしむる迄輝やき出せり。

此夫妻こそ子爵西富春人と前の韋倫嬢にして、婚禮の翌日直ちに旅の仕度を調べ、其の秘密を保つ爲め瀬川と云ふ假名を名乗り、凡そ一年半の見込にて蜜月の旅を歐洲大陸に取り、先づ手初に巴里に入込たる者なり。

韋倫は此時までも我所天が如何ほど富み、如何ほど我身を愛するやを知らず、又浮世とは如何ほど樂き所にして、夫婦とは如何ほど幸ひの者なるやを知ざりしが、旅に出る時の買物より我身に與へる衣服調度其他の飾物に至るまで、所天が最も價の高き物のみを選び我

身が欲しきと云ふ物は一刻をも移さず買求め呉れるなど、痒い所へ手の届く程なるを見て、所天の富は其愛と共に限無きを知り、斯る所天に操を盡し、斯る所天に貞女と爲らば冥加の程が恐しと、只管らに身を責めて仕ふるに至り、且は其の行く先々に餘多の人に愛せられ敬はれ、見る者聞く者皆新しく、且嬉しく、不足と云ふ者一點だに無きを見て、浮世とは斯までも幸福の者なるや、我身は如何なる月日の下に、斯程の幸福を得て生れしにやと自ら怪み、此の上若し英國に歸り愈々西富子爵夫人と名乗り出て、父にも安心せしむる事と爲らば、最早や其儘死ぬるとも厭はじと幾度か所天に語れり。

巴里に留まる凡そ半年に及びて、韋倫の生れ得たる美しさは都の化粧にて研ぎ上げ、鬘が上にも美しく、楊柳の影に行く水を眺め居たる、田舎娘の耻らひたる風情は全く消え、自然と備る氣位は、起つも歩むも三千の宮人より尊敬を受慣れて、一視同仁の愛嬌を顔ち行

く女王の如く、人の機嫌を取る如き美しさに有らで、人に機嫌を伺るゝ最と尙き美しさと爲り、見る人自ら頭の垂るゝを覺ゆ。去ればとて自ら我器量を練趁ふ様子なく、眞似るにも眞似られぬ天性のやさしさにて、物云へば春風室に満るかと思はれ、開く眼に照されては草木の露に濕さるゝ想ひあり、實に是れ生れながらの貴夫人にして、歐洲孰れの朝廷にも斯く迄の品位ある女王は無からん。爾れば寄々交際りを求人多く、夜會の外に様々の招待状を送る者引も切らねど、何故か春人は其人其場所の選嫌をすること最厳く、何とやら妻韋倫に親密の友達を作らせまじと勉むるに似たり。

女は殊に心淋しき者にして、同じ年頃の女と互に問訪づれば姉妹の如く、又親類の如く交るなどは此上無き樂なるに、春人は通り一片の近附は善けれど、用も無きに訪ひに訪れつする女同士の交りは、所天の癩に障る者なりなど云ひ、韋倫をば我身よりほか何人にも親ませぬ

様にするにぞ、韋倫は時々怪みたれど畢竟我身を愛するの餘りならん、此彼猶ほ幾月か此土地に留るうちには、自然と友達の出来る事も有らんなど思ひ直し、強てとは求めざりき。巴里の逗留猶ほ幾月か續く筈なりしに、或朝の事、韋倫は毎もの如く春人と共に宿の二階の運動場に出で、其日の新聞紙を開きて春人に讀聞せ居るうち、左の一項に讀到れり。

英國の貴族是蘭伯爵は、公務の餘暇を以て其令嬢李羅嬢を携へ、近日巴里府へ來らるゝ事となりしやに聞及ぶ。

唯譯も無き一節なれど、春人は聞きて打驚き、

「何だ誰か來る、ドレ其新聞を」

と云ひ遽しく己が手に取りて讀直し、殆ど顔色變て立たれば、韋倫は思はず、

「オヤ、何うか成されましたか？」

と問ふに、

「ナニ煙草で指を焼たのサ」

と答へ、其儘新聞紙を衣囊に納め、

「少し用事が有るから其所まで出て来る」

と云ひ捨て、孰れへか立去りたり。

草倫の心には、是だけの事固より疑ふことには有らぬも、唯だ何と無く是蘭伯爵と云ひ、

其令嬢奎羅と云ふ二人の名前が浸みて氣に掛れり、頓て二時間も経たる頃春人は歸り來

り、落着ぬ氣色にて、

「最う巴里に飽きたから直に立て羅馬へ行く、羅馬へ」

と云ふにぞ、草倫は再び怪みて、

「でも此上二月ほどは、此土地に留ると云ふ約束でしたが」

「イヤ飽きたく、羅馬が今丁度橙花の花盛だと云ふ事だから直に行く、今夜の汽車で」

急ぎ立る其様夜逃する人に似たれど、草倫は爾まで氣が附かず、唯だ我が所天は斯くも

橙花を愛するにや、日頃爾る話は聞きしにと訝るのみ。

九

斯て春人は草倫と共に、宛も夜逃の如く巴里を經ち羅馬府に移り、茲にても亦第一等の旅館を宿とし、翌日は一日名所を見物したり。

頓て夜に入り食事も済み、旅館の運動場に出て散歩し居たるに、同じ此宿の客ならんと思はる、一紳士、突々と春人の傍に寄り、

「オヤ、西富子爵、珍しい所でお目に掛りましたなア」と挨拶するに、春人は一旦ビクリと驚きしも、更に空々しき色を粧ひ、

「イヤ、私は少しも貴方を知りませんが」

「何だ僕を知らぬ、此方では覚えて居るのに、其方で悉り忘れたと有ては餘り心持の好い者では無いが、旅は道連と云ふ者、是からは昔の通り又懇意に仕様では無いか、コレ西富君、能く僕の顔を見て呉れ給へ、一昨年君と一緒に大學を卒業してから、未だ見忘れられるほど年は取らぬ積だが」

と云ひ燈光の方へ其顔を差向れど、春人は猶ほ知らぬ顔にて、

「夫は何かの間違でせう、私は貴方を知らず、又貴方の云ふ西富子爵とやらでは有ません、従つて大學を卒業した事など猶更無い」

「オ、是は驚いた、君が西富子爵春人君で無いと云ふのか」

「私は英國の一人商、瀬川と云ふ平民です、子爵と云はれるは有難いが全くの人違です」斯く云切りて呆る、紳士に再びと振向す、其儘韋倫の手を取りて自分の室へ引込たれば、韋倫は異様に思ひ、

「貴方は何故、人違だなどと仰りましたか」

と問ふに、

「ナニ西富子爵だと云ては直にお前の事を問ひ、何うか夫人に引合せて呉れと云て、遂に婚禮の祕密が現れるからサ」

と答へ更に、

「此様な所に長居をしては、何時化の皮を破られるかも知れぬ」

と云ひ、此翌未明に、又も逃るが如く茲を立ち、フロレンス府に移りたり。

フロレンスは伊國有名の一都會とは云へ、巴里、倫敦の繁華に慣たる春人は、一週間を經ぬ内に早や退屈の色見えて、倫敦ほど都合の好き所は無と云ひ、頻に歸り度き様子なれば、春人は其意を察し、最う蜜月の旅も充分ゆる好い加減に切上んかとの意を相談するに、春人は一も二も無く賛成して直に倫敦へ引返せしは、初め此地を立出しより凡そ七月の後なりき。

西富子爵の家と云へば巍然たる城の如きもの西富郷に在るが上に、倫敦にも立派なる屋敷あり、去れど春人は韋倫を其家に連行かず、町の盡れの靜なる所に閑雅なる別荘を借入れ、茲に下女一人下男一人と共に韋倫を住はせ、其身は一週七日のうち三日は倫敦の屋敷に歸ると稱し、茲に留るは毎週五日丈なれば、韋倫は初より何と無く物足ぬ心地して、斯く家の外に隠され居る程ならば夫婦にして夫婦に非ず、何とやら世に云ふ圍ひ者の趣きあり

甚だ其身に好しからねど、唯だ春人が我身を大事にすること一方ならず、時々は共に買物に出る事も有り、倫敦の屋敷より歸る時などは必ず高價なる品物を調へ來りて、韋倫の心を慰むるにぞ、斯までにせらるゝを猶ほ不足に思ひては勿體無し、其うちには婚禮を披露する時來り、我身は西富子爵夫人として世に出さるゝ時ある可しと、只管其時をのみ焦れて待つに、幾週幾月を過ぎ及べど春人は一度も披露の事を言はず、のみならず初一週に四日間はず留まると定し者が、次第々々に少くなり、果は一週間全く來らずに終る事さへ有る程となりたれば、韋倫は折を見て彼の披露の事を問ひ、又何故來る事の稀なるやなど問ふに、春人は今までに無き邪慳なる言葉を使ひ、或は左様な都合は女の知る事に非すと云ひ、或は嫉妬を焼く女は大嫌だなどと、飛でも無き返事を爲し、言葉を柔にして問返せば譯も無く腹立て、立去るなぞ、端下無き振舞も多けれど、固より生涯を誓ひたる夫婦の間に、心の變る筈

も無き故、全く何か急がしき用事の有る爲め一時氣の短くなりし丈の事ならんと、強て自ら思直せしが、或日の夕暮、春人の脱棄し衣類の衣囊に、婦人より贈られしかと思はるゝ一輪の椿の花、凋れし儘に残るを見れば流石女の氣も早く、韋倫はポツと頬を赤くし其花を持ちて春人の傍に行き、

「貴方の衣囊から此様な者が出ましたが、是は何うしたのです」

と柔かに問掛しに、春人は宛も會て羅馬の宿屋にて友達を言紛らせし時の如き、空々しき顔と爲り、

「何うも仕無いよ、入れたから衣囊の中に有たのだらう」

「イエ入たから有たのは分つて居ますが、何うして此様な者をお入成つたのです、誰の手から受取りました」

春人は眉を擧め、

「ソレ、爾云て問ふだらうと思て居た、誰の手から——其様な事が一々覺えて居られる者か、自分で折て入たのかも知れず、或は花屋に出逢て買たのかも知れずサ」

と言葉の終りは一種の嘲りと爲たれば、韋倫は初めて色を青くし、

「だッて一日衣囊へ入れ、胸に推當て持て居るには何か仔細が有ませう、貴方が餘ほど大事に仕て居た者と思はれません」

詰寄する言葉の勢ひに、春人の眼には穩かならぬ光を現し來りぬ。

春人は殆ど腹立しけに其眼を光らせしが、何思ひけん忽ち色を和けて、

「イヤ此の薔薇の花を採擷くか、夫ともお前に與へて仕舞へば好いだらう」
優しく言はれて、韋倫も少し心解け、

「ハイ爾成されば言分も有りませんが、何方かと云へば何故貴方が此花を大事にして、一日膚に附けて居たのですか、夫を聞かせて貰ふ方が―」
と云ながら春人を見詰るに、

「イヤ聞度の知度のいと云て、根問をするが女の過ちと云ふ者だ、何事も問はず何事も知らずに居るほど世に幸な事は無い」

と春人は體好く言紛らせて笑ふにぞ、韋倫も笑は笑みたれど、猶ほ花を手に持ちて眺めし
まゝ、

「コレ和女は何故物を云はぬ、誰の手から此方に渡された」

と生たる人に問ふ如く言掛るに、春人は、

「詰らぬ事を云ふ」

と云ひ、聲高く笑ひ消さんとせり、

「夫では最聞くに及びませぬ、其代り今夜芝居へ連れて行て下さいな、爾すれば此花の事も忘れて仕舞ひます、今度のクキン劇場は大層面白いと云ますから」

と其身より先づ折れて出るに、春人は再び眉を蹙め、

「何だ、クキン劇場、イヤ今夜は外に約束が有て、最う其方へ出向ねばならぬ刻限だ」

「オヤ今まで一度でも、私しの願ひを否と仰有った事は無いのに」

「イヤ外に約束が有るのなもの、ドレ爾云ふ中にも遅くなる」

とて無下に跳附け、早くも立上らん氣色なるにぞ、韋倫は重ね々氣色を損じ、殆ど悲し

けなる聲にて、

「オヤ久ぶりに茲へお歸り成つて、未だ一時間と經ぬのに、又お出掛け成るのですか」

「ソレ、爾云はれるが何より辛いよ、茲が自分の内で有て見れば、出るも入るも一切自由で無ければ成らぬ、自由で無ければ内の様な氣は仕無い」

韋倫は早や涙となり、

「何で自由で無い事が有ませう、何時出やうと歸らうと、勿論貴方の御隨意ですが」

「夫では何故、涙など流すのだ」

「イエ、約束が有るなら有る様に、今夜誰と約束で何所へ行くからと、夫だけ仰有つて下されば、何れ程私しの氣が休まるか知れませんか」

「へん學校へ行く子供ちやア有るまいし、何時から何時まで誰と何所に居るなどと、一々

其様な事を聞かれて堪るものか」

「爾仰有つては違ひませう、何で貴方を子供の様に私しが聞きますものか、唯だ所天と爲り妻と爲れば、互に何も彼も打明て、少しも隠す所は無いと、貴方から幾度も仰有つたでは有ませんか」

春人は返事もせず立上り、衣籠の時計を出して眺め、

「イヤ思たより遅くなつた、内が斯う面倒では、歸て來ても永く居る事が出来なく成るワ」

宛も捨言葉の如く云ひ、韋倫が引留むる間も無きうちに、早や戸外へ立去りたり。

後に韋倫は唯だ呆るゝ如くなりしが、思へば所天の愛、早既に衰へたるにや何の様な約束あるにもせよ、今の振舞は妻を妻としての振舞ならずと、且恨み、且悲み、眠りも得せて一宵を明せしに、翌日は春人も其身の邪慳なりしを悔しにや、晝過に歸り來り、様々に韋

倫の機嫌を取りし末、

「何うだ、今夜ならクキン劇場へ一緒に行かう」と云出せり。

「エ最う行き度く有ません、昨日は新聞に出て居る評を読み、行て見度いと思ひましたが今日は何とも思ひません」

「爾ならば好いけれど、立腹して行かぬなどと云ふのでは」

「イエ貴方が立腹させる様な事さへ成さらずば、私しから決して腹など立てません」と答ふる言葉の其中にも、猶解遣らぬ所あり。

「ナニも己から、立腹させる様な振舞をした譯でも無いのサ、併し劇場へ行かぬなら行かぬとして、今日は一日用事が無いから、最う互ひに仲能くしやう」

と云ひつゝ、春人は打寛ぎたる様子にて外被を脱ぎ、其衣囊より煙草入を取ださんとせしが、煙草入と共に水色の手袋出で、手袋の間より貴夫人が夜會の席にて共に踊る可き、紳士の名前の時留る象牙製の小箋落ちたり、春人はハツと思ひて其小箋を拾納めんとするに韋倫の手は彼れより早く先づ小箋を取上しは、心に疑ふ所あるが爲なる可し。

「コレ、其様な者をお前が讀だとして仕方が無い」

とて取上んとするうちに、韋倫は早や小箋の面に在る其文字を讀盡し、顔を紅めて目眦を吊上たり、其文字とは外ならず、外の紳士の名前の間に、子爵西富春人の名前幾度と無く書入れあり、小箋の持主たる貴夫人の名は、是蘭伯爵の令嬢李羅子とあり、李羅子の名は今見るが初てならず、昨年巴里の旅館にて新聞紙に此名あり、春人が之を見て急に巴里より立去りたる事は、今猶ほ韋倫の忘れざる所なり。韋倫は悔しげに小箋を見詰しまゝ、

「ア、分りました、昨夜私しと芝居へ行く事が出来ぬと仰有たのは、此李羅子さんと夜會に臨む約束が有たからですネ」と問詰むる、其聲さへも早や震ふかと疑はる。

一一

我身の請ひは斥けて、却て他の令嬢と夜會に臨み、而も其令嬢の持居たる小箋を、實の如く大事にして隠し持てるかと思へば、腹の立つも無理ならず、是を腹立てぬは妻に非ず、春人は聞きて眼に角を現はし、冷かに韋倫の顔を見るのみにて返事せん様子も見えず、韋倫は猶も震へる聲にて、

「エ、爾でせう、私しを連て行れぬと仰有たは、全く此李羅子さんとやら云ふ方と、夜會に

臨む爲でせう」

春人は最と横柄に、

「爾だよ、爾だが何うした」

何うしたとは、何たる言葉ぞ。

「何うも仕ませんが、夫では餘まり、ハイ餘まり無情さ過るでは有ませんか」

「少しも無情さ過る事は無いよ、地位も名譽も無い人間では有舞し、西富子爵と云ふ身分が備って居て見れば、其身分を支へる丈の交際もせねば成らぬ、夜會にも臨まねば成らぬ」

「夫は能く分つて居ますが、身分の有る方は其身分だけに、夜會にも宴席にも、皆其の妻と共に臨むでは有ませんか、妻を一宵泣明させ、隠して宴會に臨むのみか、此様な小箋まで

大事にして持て居ねば成らぬと云ふ、其様な交際が何所に有ます、小箋の面に書て有る、此李羅子と云ふ名前の女は何方です。何うした女です、夫も私しには云はれ無いですか、益々鋭き劍幕に、此上募らせるは面倒と思ひしか、春人は唇の一角に微なる笑を浮め來れり、韋倫は猶も、

「若し李羅子さんと云ふのが、貴方に何でも無い他人ならば、何故此小箋を貴方の衣囊へ入て有ます」

「イヤ爾云ふと角が立つ、何も故々入たと云ふ譯では無いよ、成るほど私と一緒に幾度も踊たけれど、イヤ踊るに付けては見らるゝ通り、私が自分の名を書入れたけれど、此様な小箋を大事に持て居る筈も無く、手袋を納めるとき手袋に擲て私の衣囊へ這入たのを、今まで氣が附かずに居た丈の事、夫だのに彼是れと氣を廻し、譯有て持て居たかの様に思は

れては實に困るよ、お前が爾う氣を廻すから、私も止を得ず物事をお前に隠さねば成らぬ事となる、昨日とても實は今夜是々の約束で是々の夜會へ行き、是々の貴夫と同席すると、一々言聞せるは易かつたが、夫を言聞かせてはお前が又も氣を廻し、彼れ是れと疑つて其辯解に時を移し、刻限が後れては成らぬと思ふから、夫で何にも話さずに行く事に成つたと云ふのも、女は氣を廻したり、嫉妬を焼たりするのが極好く無い、夫が爲に所天にも迷惑させ、自分も餘計の氣を揉むと云ふ者だ、エ韋倫、爾では無いか、

と如何にも道理らしく説諭せど、韋倫は猶ほ氣に落ぬ所多く、
「ナニ氣を廻すのぢや有ません、所天が今何所に居て何をして居るか、夫くらゐの事を妻が知るのは當然だと思ひますから」

「イヤ當然で無い、所天が外へ出る度に今日は何所から何所へ廻ると、一々妻に斷たのは昔

の風だ、交際の忙しい今の世界で其様な事が出来る者か、お前は年に似合はぬ昔風の考へばかり持て居るから、チト自分で氣を附て直さねば了けぬ、私などの考へでは所天を充分に信用し、所天に充分の自由を與へるが妻の第一の心得、夫で無ければ夫婦の愛情が、何時までも衰へずに居ると云ふ事は出来ぬ者だ」

「或は爾かも知ませんが、夫にしても此李羅子さんとは何方です、何した女です」

「イヤ、猶だ氣が揉るのか、隠した所で目下交際社會の、大達者とまで云はれて居る令嬢だから、遂には新聞紙の記事や何かで詳しくお前の耳に入るだらう、爾サ、目下歐洲屈指の大政治家と評せらるゝ、是蘭伯爵の一人娘で、十七歳の時母に分れ、今は伯爵と唯二人だが殆ど伯爵家の女王とも云ふ有様で、伯爵に掌の中の珠と愛せられ、他日伯爵が死でもすれば、非常な身代が嬢の手に移るから、交際社會で殆ど引張瓶と爲り、嬢と一回でも共に踊事

が、非常な名譽の様に成て居る、年は當年廿歳だらう、器量も今では英國第一と云はれて居るが、夫は未だ西富子爵の令夫人、韋倫の顔を見た事の無い人の云事サ」

と笑顔をして説明し了りたれば、韋倫は漸く心弛み、扱は我が疑ひは全く所天の云ふ通り氣を廻すと云ふ者なりしかと、幾分は早や氣耻かしき想ひもすれど、猶ほ無言にて考へ居るに、春人は此上にも疑ひの根を絶んとてか、更に柔かなる言葉にて、

「全體世間の妻君達が、所天が少し外の女と親くするのを彼れ是れ云ふが、是ほど氣の知れぬ話はないよ、所天の目では自分の一番氣に入れた女を、我が妻にするのぢや無いか、シテ見れば、妻と云ふのは世界中で一番其所天に愛せられて居る女で、縦しや所天が外の女と交際を仕た所で、妻に對する其愛が、爾う容易に消る筈はない、お前に仕た所が爾では無いか、假へば私か此李羅子と親くするだらう、夫を見て李羅子さんが羨しい李羅子さんに

成替りたいなどと、此様に思ては大變な間違だよ、お前が李羅子さんになり、李羅子さんが私の妻に成て見るが好い、其時には羨しさが百倍も増し、成る程妻ほど所天の愛を澤山に得て居る者は無いと、斯う思ふからだ、シテ見れば、既に妻と爲た上で嫉妬など燒くのは、自分が此人の妻だと云ふ事を、忘れたのも同じ事では無いか」

とて最と分り易く説聞かすにぞ、韋倫が燃居たる心全く收り、古人が、

「夫婦喧嘩は如何ほど激しくとも、其結局は大抵接吻に終る」

と云ひし如く、此争ひも亦接吻に結局し、韋倫は我身の眼前に、如何なる惡運の横はり、如何ほど速かに、我身の方へ推寄せ來つゝ、有るやも知り得ざりしは、是非も無き次第と云ふ可し。

一一一

此時は是れ八月の央にして、今まで田舎に暑を避け居たる、貴紳歴々も涼風と共に、追追倫敦に歸り來り、所謂る倫敦季節とて、交際社會の次第に賑しくなる初頃なりしかば、春人が韋倫の許に在る事稀にして、倫敦に留ること多くなりしも、之が爲にや有る可きなれども、春人は韋倫が倫敦に行くことを好まぬ様子にて、倫敦の風塵は柔かなる女の皮膚に宜からねばなど云ひて、夫と無く制するにぞ、韋倫も其意に従ひ、成可くは住居にのみ引籠り居たるが、或時フト思ふ様、女子既に所天を持たば其日よりして、婚禮の指環と云ふ者を嵌め、我身に主人の有る事を示すなるに、所天が同じ指環を嵌め、其身に妻ある事を示さぬは片落の沙汰とも云ふ可し、既に世間には夫婦一對の婚環を取交す人さへ有るに

春人が指に、有妻の記を纏はぬは不都合なり、好しよし、我身の工夫にて然る可き指環を作らせ、此次の彼れが誕生日に、不意に我身よりの贈物として彼れを驚かしめん者と、春人の日頃の誠めを忘れ、頓て自ら倫敦に出行きて、思ふが儘に注文し、明後日又受取りに来る事を約束して、ハイド公園の邊まで歸り來りしが、此時公園に輦り入る一輛の馬車の中に我所天春人が、我身と同じ年頃の一美人と相乗して有るを見たり、韋倫は痛く驚き、若しや我が眼の迷ひには有らぬかと、再び見るに全く所天春人に相違無く、美人は天女かと疑はるゝ程の容貌なり、殊に春人が深く美人の氣に叶はんとする如く、只管嘆服の色を面に浮めて、美人の顔を見詰つゝ、話せる様、彼れが曾て我身を妻とせる頃、我が顔を見詰しより猶ほ熱心に見受らるゝにぞ、韋倫は其所に立すくむ許りなりしが、其中に馬車は早や彼方へと行過ぎたり。

韋倫は其行く影を眺めて、胸に劍でも刺透さるゝほどの痛みを感じしも、外に詮方なき場合なれば、其儘家に歸りしが、翌々日に及び註文の指環受取にと、再び倫敦に行き、再び其歸る途に同じ所を過たるに、是が悪魔の引合せとも云ふ可きか、再び同じ馬車の中に春人が同じ美人と相乗し、同じ方に行くを見たり、此時とても春人は我身に氣附ず、行き過しが、韋倫は心に前よりも、亦一入の痛みを感じ、唯だ其所に倒るゝかと思ふ程なりしも、馬車の既に去りたる後に如何ともするに由無し、迫上げ來る涙を抑へて、住居へと歸り來りぬ。

斯て一室の中に入り心を鎮て考へ見るに、是も或は交際の都合にて、如何なる事情に由れるも知れず、妻の有る身が眞逆に外の婦人に心を寄せ、其身其婦人及、其妻の生涯を誤る如き振舞をする筈も無く、是も或る春人の云ひし、女の淺薄なる心にて、氣を廻すと云ふ者な

らんか、妻として外の女を羨むは、我身が妻たるを忘れし者なりと、説聞されしも茲の事かト、流石に辨深き質だけに、漸くに思ひ返し、自ら我心を慰めは慰めたれど、夫にしても又儂きは我身の上なり、縦しや所天に仇し心は無きにしても、妻として所天が何の都合にて誰と交際を爲せるにや、其相乗して毎日公園に行く女は誰、又何の爲ぞ、斯る事さへ知らずして妻と云ふ事孰れに在らん、我身は妻にして猶妻と云ひ披露はせず、とは云へ夫婦は一體にして、一つ世界に暮す可き筈なるに、我身は何も彼も全く所天と別々なり、所天は所天だけに自ら其身の世界を作り、我身を其の中に入れしめず、我身は所天の世界の外なる最狭き區域に住み、所天の世界を窺かんとするも得べからず、今までは夫とも氣附ねばこそ、左まで心を苦めざりしが、氣附たる後は、如何でか此の餘所々々しさが忍ばる可き、所天が交際するも好し、仇し女と共に運動するも好し、唯だ我身が其の同じ世界に住み、所天

の用事を我用事とし、所天の苦樂を我苦樂とし、世間の夫婦と同様に所天と一つ世界に住む身と爲らば、諫めもし勸めしも、天晴れ妻たるの道を盡しも得ん、初は我身を妻なりと披露し難き都合も有りつれ、最早や連添ふこと一年の餘に及び、切るにも切られぬ仲と爲り、如何ほどの都合ありとも到底披露せず置る可きやは、此上に其披露を猶豫するは妻として妻たる道を盡さぬ者、所天として妻に相當の世界を與へぬもの、良しく、今度春人の來る時は、必ず夫婦の披露を早速行ふ事に取極めん。

斯く思ひ定めたれど、猶ほ我心の孰れやりに彼の相乗の美しき女、氣に掛る所あり、夫婦の披露を爲すにもせよ、萬一所天が心の中に、妻にも猶ほ語り難き秘密の事を隠し置かば如何にせん、問ひて答へぬ秘密ならば問ふも益無し、我身自ら探り究むるに如かず、探り究めて切ては彼女何者なるや、所天は彼女と何事を爲せるにや、是だけの事を知りし上

にて、今云ふ披露の相談に移る事とせん、是だけの事を探知るには、自ら所天に知らさずして、其後を尾行きて見届くる外は無しと、漸く思案一決したれり、是よりして只管らに春人の歸り来るを待居たり。

一三

所天の後を尾行きて其振舞を探らんとは、女の身に有るまじき業には有れど、韋倫が今の場合は唯だ此外に手段無く、我が心に疑ひを晴さん爲め、止を得ぬ事と云ふ可きか。去れば此次春人が來りし時も、韋倫は其疑ひを顔にも言葉にも現さず、吾身が彼の相乗を見しなどは更に知さず、毎の通り持做せしが、春人は一夜を茲に明し、翌日の午後三時半に馬に乗りて倫敦へ出行きたれば、其後に韋倫は匆々に仕度を調べ、或る可く人目に

立たぬ様最も地味なる服を着け、外套に我が身體を包込み、四時發の汽車に乗り倫敦に向ひたり。

倫敦にて西富子爵の邸と云へば、ハイド公園に面したる一構にして、私人の宅とは思はれぬほど立派なれば、孰れの辻馬車の御者に聞くも、殆ど之を知らぬ者無く、韋倫は宵の程より、其門前なる人目に觸れぬ邊に佇立み、出入の人にのみ目を注ぎ居るに、頓て八時とも覺しき頃、一輛の馬車出來り其戸を開きて控ゆるは、是より主人を乗せて孰れに行かんとする者なるべく、間も無く其傍らに現はれて、靜に之に乗り、

「是蘭邸まで急げ」

と命ずるは擬ひも無き我が所天なり、是蘭邸はモント、ゼームス公園の邊に在り、韋倫は之を知ざれど既に其名を聞きしからは、馬車を尋ねて後より追行くも遅からずと、先づ春人

の馬車を遣過し、其の後にて辻馬車の屯所に至り、御者に聞くに、

「知て居ます、私しが参りませう」

と進み出る者ありたれば、直に乗りて走らするに、暫くにして御者は、

「茲です」

と云ひ、西富邸にも劣らぬほど立派なる屋敷の門前に停りたれば、韋倫は先づ様子を見るに、所天春人の乗來たる馬車も猶ほ一方に控へ居るにぞ、扱は彼れ、今此邸内に在る李羅子とやら云へる令嬢と、何か話でも爲し居るにや、入行きて密に様子を伺ひ度けれど、眞逆に爾る事も出来ざれば如何にせんかと、思案も未だ定らぬに、早や玄關より誰やらん立出ると見え、下僕らしき者現れたれば見咎められては成らずと思ひ、自分の馬車を物影に潜ませつ、猶も玄關の方を見て有るに、間も無く茲に立出るは、我が所天春人の其手に縋りて裏々

と歩み來る一美人、是が令嬢李羅子なる可し、曩に春人と相乗せし其女なり。韋倫は薄暗き所にて、我頬の熱くなるを覺えたれど、今更ら驚く事も無く心を静めて待つ中に、春人は美人を扶けて恭々しく己れと共に馬車に乗せ、御者に何事かを細語くと齊しく、其馬車は早や門外に走り出で韋倫の立つ前を通りて過たり、彼等二人孰れに行くにや、眞逆に此の夜中に、當も無き運動には有ぬならんと怪む様を、事の慣れたる御者は見て取り、

「密に今の馬車の後を尾かせせうか」

と問ふ。ア、御者にまで我が端下なき振舞を見抜れしかと思へば、益々顔の赤らめども、

其外に工夫無ければ、

「爾してお呉れ」

と小聲に命じ、直ちに追掛け初めたるに、向ふの馬車は早や半町ほど先に在り、右に左に大

道を経曲るうち其影を見失ひたれど、御者は少しも怯む色なく、

「ナニ道順で見當は分つて居ます、クキン劇場へ行つたのです」

扱は我身が願ふとも連行かざりし劇場へ、彼の令嬢を連行くにやなど、忙しき中にも氣を廻しつ、走るが儘に任せ置くに、頓て馬車は白き息吹く馬と共に、クキン劇場の入口に停りたり。

茲にて通例の人ならば、殆ど汗をも潰す程の高き賃金を拂ひ渡して、馬車を返し、韋倫は劇場の入口に進み行くに、其雑踏は云はん方なく、如何にして漕分く可きやをも知らぬ程なれど、兎に角後部の方の一席を買ひ、之に座すれば満場一目に見渡せる事だけは知れる故、漸く思ふ席を買ひ覆面を深く垂れて、我身の誰とも分らぬ様になし、無事に入込は入込たれど、暫しが程は唯だ逆上せて眼眩み、何が何やら辯ずる能はず、斯ては果じと心を

落着け、光の輝く満場を見渡すに、向ふの方なる第一等の棧敷に、皇族の席と隣りて我が所天春人が、彼の美人と座せるを見たり、韋倫は忽ち胸轟き總身の震ふを覺えたれど、猶ほも其方を眺むるに、春人は日頃よりも立派にして、宛ながら國王かとも疑はれ、其傍に列なる彼の美人は、衣服の着附けより、身の廻りの装り物、總て満場を壓倒する計りにして、幾千の看客は皆眼を其方に奪はれ、殆ど舞臺をも忘れたるに似たり。

一四

見れば見るほど立派なるは、我が所天春人にして、見れば見るほど美しくきは、其傍らに在る李羅嬢なり、韋倫は二人の親けに語ふ様を見、胸も燃立つ思ひなれども、唯だ二人の心と心に、戀人同士の相愛する如き深き情愛の隠れ居るにや、夫とも唯だ紳士として、令

嬢として日頃より親しき友達なるが爲め、兄妹の如く睦み合ふ丈なるにや、开を見抜んとのみ思ひ、二人の目配より其の互の仕向方に目を注ぐに、春人の様子には充分の熱心現はれ、唯だ友達と云ふ丈とは見受難き所も有れど、斯は或は嫉妬と云ふ我胸にある悪魔の仕業ならんも知れずと、強て自ら疑ひを搔消しつ、更に嬢の様を見るに、語りもし笑もすれど、春人ほどの熱心な様子は見えす、先づ純粹に氣の合たる友達なるに似たり、男同士の氣の合ふとは違ひ、男と女の氣の合ふは唯だ氣の逢ふと云ふ丈には止り難く、得て氣の合ふより猶上にまで登り易き者とは知れど、幾分か先づ安心の方なれば、漸くに胸を撫で、猶ほ終るまで見て有るに、韋倫の隣に坐す男女幾人の一群は、芝居を見るより唯だ見物中の紳士貴婦人を多く知れるを誇り合ふ如く、初より眼鏡など遣取りして、彼れは何、是は誰など限なく評し居たるが、頓て芝居の終らんとする頃に及び、其一人は李羅嬢に目を注ぎ

「併し彼所に居る満場第一の美人は、諸君皆な知て居るだらう」と云ふに、一三人異口同音に、

「是蘭伯爵の令嬢李羅子を、知らぬ奴が有る者か」

と答ふ、前の一人、

「併し李羅子と一緒に居る、今夕第一の仕合者の名は知るまい」

負けじと競ふ、又一人、

「西富郷の子爵西富春人と云へば、四年以前に相續して、今では貴族社會で最も有福の中に數へられる一人サ、君方はアノ子爵と同席した事は有るまい、僕は斯見えても、汽車で同じ室へ乗合せた事が有る」

「是は可笑い、同じ汽車へ乗合せたが同席か、僕なども其様な事は幾度も有うが、氣に留ぬ

から覺えて居ぬ、併し先では僕の顔を覺えて居るかも知れぬ」
「巾着切の様な男だと用心した爲か、アハ、ハ、併し君はアノ子爵と李羅嬢に就て、最新の一件件を未だ知るまい」

「知て居るとも、今夜一緒に芝居へ来たと言ふのが、最新の報道では無いか」

「詰らぬ事を云ふな、爾では無い、來春には二人が結婚すると云ふ噂が有るぜ」

「成ほど其様なことを、何所かで聞いた」

結婚の噂と聞き、韋倫は一入耳を濟したれど、此時宛も芝居は終りと爲り、満場の雑踏と爲りたれば、其後を聞く能はず、唯だ春人が最と丁寧に、李羅嬢の肩へ外套を被せ遣りて、其手を引つゝ、出去るを見たるのみ、

斯て群衆と共に茲を出で、夜更て我住居へ歸着きしが、是よりして唯だ、

「來春結婚」と云ふ語のみ氣に掛りたれど、又思へば既に我身と云ふ妻の有る春人が、外の女と婚禮など出来る筈なく、出来たとてする筈も無く、畢竟彼れが李羅嬢と共に居たるを見て、口より出任せに言ひ者ならん、人の噂など云ふ者は、總て此類の他愛も無き者なるに、开を氣に掛るは愚の至り、是と云ふも我身の疑ふ心より、所天の振舞を探らんとせし、其過ちより出来りし者なれば、此後とても疑へば疑ふほど、益々根の無き事柄に欺かれ、愈々我身に心配の數を増すのみなれば、再び斯る端下なき振舞をする者に非ず、李羅嬢と春人は、唯だ貴族同士の交際に留るならんと、一旦痛く疑ひたる反動に、今は自ら我身を矯め我心を吐り鎮めて、是までと異なる事なく春人に仕へ居たるに、唯一つ怪きは、春人が韋倫の倫敦に出るを止む事、益々屢々にて、果ては新聞紙なども、我る可くは讀まぬ様にせよなど、事に托して言聞ける事も有り、扱は倫敦に行きなどして、自然根も無き噂を聞き、我と

我心を苦むる如き事あらんを慮り、殊更に誠むるにやと云ふが儘に従ひ居たるも、何様妻として所天と世界を別にすること、心苦しき限なれど、一旦燃たる心の火は、又再び燃初め切ては新聞紙だけなりと讀まば、所天の大事は自ら分る事も有るならんと、殊更に貴紳上流社會の事を多く記せる、新聞紙一種を日々配達させ、所天の歸り來る頃には、其の讀殺を仕舞ひ置く事と爲し居たるに、此年の末方に及び、或朝の新聞に、

「上流の結婚」

と題し、左の一項あり、曰く、

「兼て密そくと噂に聞き居たる、是蘭伯爵の令嬢李羅子姫の結婚は、愈々事實となれり、其の多幸多福なる婚君は、誰あらう西富翁の子爵として、倫敦にも宏大なる控邸を構る西富春人氏なり、倫敦なる氏の邸は既に其用意として、一切の飾附を、ヘンデン室内粧飾會

社に命じたり、結婚の式を擧るは來春二月なりと云ふ」

云々。韋倫は幾度も此一項を繰返して讀直せり、ア、憐む可き彼れが心の中は如何ならん。

一五

代 一 嬢

愈々我が所天春人が、來春李羅嬢と婚禮する乎、是れ固より僞りなり、韋倫は幾度も其新聞を讀返したれど、露ほども眞實と思はず、其の室内粧飾會社に命じて屋敷を飾らしむると云ふ如きは、吾身を妻と披露して、屋敷に迎へん爲めならんのみ、我身が既に春人の妻たるを知らず、斯る僞りの記事を載するは我身の位置を奪ひて、我身が世に出る道を塞ぎ、我が名前を無視にする者なれば、早速春人の名前を以て明かに此記事を取消さしめねばならずと、韋倫は一圖に思ひ詰めて春人の歸るを待つに、此日も翌日も歸らずして、

翌々日に及び漸く歸り來りたれば、韋倫は右左の挨拶よりも、先づ春人の手を取りて、

「大變な用事が有ます」

と云ひ何事にやと驚き怪しむ春人に、問返す暇も與へず、其まゝ我室に引連れ行き、

「先づ此新聞を御覽なさい」

と云ひ、卓子の上に廣けたる彼の紙面を指すに、春人は忽ち色を失ひしも、又忽ち平氣に返り、嘲笑ふ口調にて、

「何だ詰らぬ、劍幕が甚いから己は賊でも射殺して、其死骸でも見せるのかと氣遣つた、

何んだ、新聞紙、是が何うした」

「何うしたか、先づ此雜報を御覽なさい、サア、サア」

と突附るに、春人は無言にて讀終り、

「何事でも無いぢや無いか」

韋倫は瞋りし聲も鋭く、

「何事でも無い事が有ます者か、私しの身の一大事です」

「一大事、何が一大事」

「何がとて是が貴方に分りませんか、私しの所天の事を、妻も無い人か何ぞの様に婚禮するなどと書立て」

春人は呵々と打笑ひ、

「其様に云ふたとて、己の書た者では無い」

「貴方の書ぬ事は分つて居ますが、貴方が書れて居るでは有ませんか」

「新聞に書れるのは珍らしく無い」

「外の事を書れたのは事柄が違ひます、私しの身分にも名前にも拘はりますから」
「拘はるから、何うしろと云ふのだ」

「貴方の名前で、立派に取消させて下さい」

「取消させる、何だ一昨日の新聞だが、今更ら取消したとて仕方が無い」

「一昨日の新聞だから猶更ら取消を急ねば成りません、新聞は一昨日でも事柄は來春と有ますから、今取消するのは遅過ません」

「新聞を爾う買被ては仕方が無いよ、勝手放題な事を書くのだから」

「勝手放題にもせよ、斯う詳しく書て有ては誰でも嘘とは思いません、貴方が其の用意として室内の飾附迄命じたと書て有ては有ませんか、全く室内の飾附をお命じになりましたか」

「夫は命じたよ、一昨日頃から、既に其會社の技師が來て見積など仕て居る」

「夫は私しを迎へる用意でせう」

「爾と限た譯でも無いが、兎に角飾り附が古く成たから仕直す丈の事サ」

「其様な事は何うでも好い、兎に角貴方には韋倫と云ふ妻が有るのに、其人を指して、來春婚禮するなどは餘り失禮な書方です、早速取消させて、再び此な失禮な事を書かぬ様に、私しと貴方の婚禪を披露してお仕舞ひ成さい」

「韋倫が嚴しく責立れど、春人は唯だ笑談の如く聞流して、更に應ずる氣色無きにぞ、韋倫は決然たる容色にて、」

「イエ貴方は新聞紙を夫ほど詰らぬ者と見るかも知ませんが、私しは爾は思いません、之を取消さずに置けば、世間の人に全く此記事を誠だと思はれても致方が有ませんから、私しの名前で取消文を送り、夫々手續を盡します」

と云ふに、春人は少し驚き、

「其様な事はせぬが好い、夫だから新聞紙などは讀まぬ様にしろと云て有る」

「イエ私しは夫だから讀まねば成らぬと云ふのです、讀まずに居れば、何萬と云ふ世間の讀人が、何れほど私しを踏附た記事を信じて、知らずに居ねば成ません、貴方が取消させて下されば好し、下さらねば、イエ最う達てとは申しません」

「達てと云はずに、自分で取消文を送る積りか」

「爾ですとも、決して世間の人々が此記事を信ぜぬ様、充分な取消しを送り、其上李羅嬢にも詫手紙を送らねば成りません」

「何だ李羅嬢にも」

「爾ですとも、私しが此記事で迷惑する通り、李羅嬢も迷惑して居ませう、全體云へば貴

方が取消を出させた上、暫したりとも貴嬢の名前まで掲させたは、全く拙者の不行届きで有たと云ふ、詫手紙を李羅嬢に送るのが當然です、夫を貴方が成らねば妻として私しがするるのが當然です」

「イヤ其様な事はさせぬ、お前と私の婚禮は未だ世間へ披露せぬ約束なのに」

「其約束は此様な事は有るまいと思たから結だのです、世間の人々が私しを社會の底へ埋めて仕舞ひ、再び世間へ出られぬ様に此様な新聞まで出して、夫を貴方が取消して下さらぬ様では、何と仰有つても仕方が有ません、私しは自分の權利を以て邪慳な世の人と争ひ、塞だ道を切開き、埋めた土を跳返して世に出ねば成ませぬ、貴方は婚禮を秘密にし、私しを此様な所へ隠して置のが、何れほど邪見に當るのか、御自分では知ますまいか、妻として妻と云ふ位置も名前も得ず、世間の人に無い者同様に思はれて、所天と全く別々の世界

に住むが、何れほど辛いと思ひます、今までは忍で居ましたが、此様な事を書れてまで夫を忍んで居ては、自分で我身を踏附る様な者で第一親にも濟ません、自分の身にも濟ません、一時は貴方の都合でも、最う充分披露する時が来ました、披露せねばこそ人が此様な事を憚らずに書くのです、貴方の言葉と有れば何の様な事でも堪へますが、此れ許りは堪へられません」

と日頃の恨まで、知らず識らず言立るに、春人は持餘し、宥むる如き調子にて、

「イヤ婚禮の披露は後で又相談する事にしやうが、兎に角此新聞の取消しばかりは」

「此新聞を取消さねば、婚禮の披露も出来ぬと云ふ者では有ませんか、私は貴方が此新聞を見さへすれば、直に取消すと仰有る事と思ひましたのに、是を取消させるのが何故其の様に辛いのです、取消さずに置いて、妻に是ほどの辱しめを掛け、李維嬈にまで迷惑を

掛るのが辛い筈では有ませんか、エ貴方は新聞を取消させるが、何故夫ほど辛いのです」
「ナニも辛いと云ふ事は無が」
「辛く無ければ直に取消させてお仕舞ひ成さい、夫が出来ねば今申す通り、私しから取消させます」

「イヤ、夫は了ない」

「何故、了ません」

「己に都合が有るから」

「都合とは何の様な都合です、妻に是ほどの辛い思ひをさせ、新聞紙に此様な根も無い偽りを書せて置くと云ふ、夫ほどの都合が何所に在ります」
と問詰められ、春人は益々當惑の色を現し、隠さんとすれど隠し得ず。

一步も容さぬ韋倫の言葉に迫られて、春人は唯常惑の色を増すのみ、何と答ふる所を知らず、韋倫は猶其言葉を厳しくして、

「イエ貴方が何故に取消を夫ほどや嫌ひ成るか、其譯を私に聞されぬと仰有れば、達て聞くには及びません、私しは唯だ自分の名を保護し、自分の身を守る爲め、自分で取消を送る丈けです」

と言切りて、早や其所を立んとす、春人は急ぎて引留め、

「コレ、何うしても思ひ留る事は出来ぬか、今其様な事をされては、私の迷惑は大變だが、無根の事を取消させるが迷惑とは、怪む可き限なれど、韋倫は敢て其譯を聞んとはせず、

「如何ほど御迷惑でも、自分の妻を社會の底へ埋めて仕舞ひ、妻の身分を失はせて、夫で好いと云ふ様な邪見な仔細は有ません」

「イヤ有る、夫が有るから此通り留るのだ、是ばかりは何うか此儘に捨置て」

「では何の様な仔細です」

「イヤ其仔細は云ふに云はれぬ」

「云はれぬ様な仔細の爲め、思止る事は出来ません」

「では、云へば思止つて呉れるか」

「ハイ、仰有れば聞た上で私しが判断します」

春人は最言にくげに、暫し首を垂れて考へ入りしが、頓て思切りたる様子にて、

「云ふたとしてお前が靜には能く聞かぬ、お前の耳へは入られぬ」

「イエ、貴方が云ふて憚らぬ事柄ならば、私しも聞くのを憚りません、夫とも貴方が何うしても言憎いと仰有れば、私しは聞かずに取消を出しませう」

「イヤ夫は了ぬ、言ふよ、言ふよ、言ふから先ア待てお呉れ」

「夫なら仰有い、サア聞ませう」

「言ふけれど、悪く思つては了ないよ、今から能く断つて置くが、お前には實に濟まぬ、重々濟まぬ、何うか何時までも聞さずに隠し度いと思つたけれど、お前が爾う言張れば最う仕方がない、實は—」

實はと云ひて躊躇ふにぞ、韋倫も何か容易ならぬ一大事を聞さるゝ事と覺悟し、端然と容を正して、

「ハイ實は—何うしました」

「イヤ實はお前に濟まぬ、私は穴へでも入度いが、實はお前は—」

「ハイ實は私しは」

「お前は實は、私しの妻では無いのだよ」

「妻で無いの一言に韋倫は全く血色を失ひて、紙よりも白くなり。」

「妻で無ければ、貴方の何です」

と問返す。其聲は一種の人間以外より聞え來る聲かと疑はる。春人は唯だ面目無げに、額の脂汗を拭ひながら、

「ア、妻の様に思はせて置いたのは私が悪い、お前は妻でも何でも無い」

韋倫は猶ほ充分には、合點し得ぬにや、

「婚禮した者が妻で無いとは」

「イヤ婚禮せぬ、アレは唯だお前を安心させる爲に、婚禮の眞似事をした丈だ」

「眞似事でも、長老まで立合たから其儀式は同じ事」

「イヤ長老で無い、アレは唯の人で、私の友達、馬淵春助と云ふ者だ、長老で無い者を長老と云ひ、婚禮で無いのに婚禮と云ひ、妻でも何でも無い者を今まで妻と思はせて置たのは、お前を欺した様な者で重々私の過ちだ、今更ら後悔に堪へぬから、此通りだ」

と云ひて兩手に顔を隠し、其儘に首を垂れたり。韋倫は初て言葉の意を呑込得し如く、

「エ、エ、妻で無い、夫が本統ですか、誠ですか」

と絶叫し、座せる椅子より飛放れ、殆ど俯向に倒れんとする如くに踉蹌きしも、又忽ち前に打伏し、

「夫ではアノ長の年月私しを欺いて、罪も無い者の身を瀆し、心を盗み、家を捨て、親を

捨てさせ、エ、此様な邪慳な、恐しい振舞が又と有うか」

魂消る許りに泣伏て泣叫び、其儘息も絶入るかと思はれしが、稍あつて其泣聲の中より、切々に聞ゆる言葉は、

「エ、餘りと云へば情無い、是が婚禮だ、是が儀式だと、何にも知らぬ少女を欺き、虫一つ殺しもせぬ清い生涯を誤らせて、是が神の有る世の中に在る事が、妻と思へばこそ、所天と思へばこそ、夫が今更ら妻で無い、所天で無い、神は此様な悪人を、罪も無い此身を」と充分には聞も取れねど、言葉に餘る恨みと悲しみは、唯だ其身體に波の如く起伏する一方ならぬ痙攣にて察せらる。春人も今は見兼ねし如く、

「コレ韋倫、其様に悲む事は無い、此身の愛が今も其時も、此後死る時まで少しも變らぬから好いでは無いが、縦し妻で無いとしても生涯切るに切られぬ中、互ひの愛は夫婦も

同様、イヤ夫婦にも猶優る愛を以て、お前に生涯不自由は掛けぬ、コレ爾う泣かずと機嫌を直して」

と泣伏す背を撫摩するに、韋倫は恨みに聲も術無く、

「オ、那の恐しい言葉を、神は何と聞給ふか、此様な穢らはしい振舞を愛情とは、エ、是が愛情か、邪慳な、無慘な、鬼々しい偽りが、エ、悔しい情無い、此様な人非人は又と世間に有る事で無い、一日や二日で無く、幾月も幾年も、一緒に居る者を欺き、神までも欺いて妻で無いのを妻だと云ひ、何うして氣が咎めずに居られたやう、人で無い、人で無い悪魔だ、悪魔だ」

唯だ叫ぶのみ、其顔を上げもせざれば、春人は愈々持餘せし如く、又も言葉を柔けて

「コレ、韋倫、其様に云ふ者では無い、私はお前が是ほど悲まうとは思はなんだ、成るほ

ど悪い事は悪いけれど、何も悪氣で仕たては無く、唯だ愛の爲め分別も無く斯成たのだから、夫を思へばお前が勘辨して呉れて、遂には日影の身も辛抱し、楽しく此世を送る事に成るだらうと思つて居た、是れ、泣くので無い、何も彼も過た昔と思ひ直して、勘辨して呉れ」

と云ひつゝ抱起さんとするに、韋倫は此言葉に又一入の腹立を加へ、泣聲を止めて起上り、

「勘辨するとして、是が勘辨の出来る様な一通りの罪だと思ひますか、男か女に加へる罪で、是程の罪が有ますか、私の何の言葉、私の何の振舞で、貴方は是ほどの罪を私しが勘辨するだらうと思ひました、餘り私しを見下し過ると云ふ者です、例令ひ身體は汚されても、此罪を勘辨するほど未だ心まで腐りません、生れて今まで、貴方を此様な人と知らず愛したのが、後にも先にも唯一ツの私の過ち、此外に何の過ちも何の罪も無い女を、何

で其様に軽々しく見て仕舞ひ、此様な罪を勘辨するだらうと思ひます」
責る言葉は劍より猶鋭く、流石の春人も殆ど韋倫の顔を見る能はず。

一七

凡そ人の罪、清き少女を欺きて其愛を奪ふより深き者あらんや、金錢を奪ふの罪は、金錢を以て償ふ可し、唯だ愛のみは償ふ可からず、女の眞の清き愛は、唯其の初ての愛の外に非ざればなり、人の命を奪ふもの、唯だ其の殺すと云ふ一時の苦痛なり、愛を奪ふは生涯を苦め、生涯な誤らしむるなり、心を殺して身體のみ活せ置き、事に付け、物に觸れ、一刻も忘るゝ暇なき無上の苦痛を忍ばしむるなり、唯だ風儀の紊れし社會に住み、紊れし家庭に育ちたるもの、愛の如何ほど神聖なるやを知らず、之を偷むの罪、倫まるゝの苦痛、

如何ほど深きやを知らぬは、嘆かはしき次第ならずや。

韋倫は我身の生涯、茲に盡たる如く思ひ、唯悲みに沈むのみなりしが、暫くして、又燃上る怒りと爲り、春人の前に立上りしも、思へば今まで愛しもし愛されもせし春人が、是ほど邪慳、是ほど賤き事をして顧みざる無耻の痴者ぞとは、眞逆に思はれぬ所あり。

「本統ですか、本統に彼の婚禮が、其様な偽りですか」

と推て問へり、春人は今まで我云ひし言葉を取消し、韋倫に詫り度き程に思ふ可けれど、今は消すにも消されぬ場合、彼れは唯だ厳き判事に問詰めらるゝ罪人の如き顔色にて、

「何と云はれても仕方が無い」

と答ふるのみ、韋倫は唯だ春人の罪深きに呆れ果て、此立流なる容貌に何して斯までの穢はしさを包るやと怪みて、彼の顔を訝り見るのみなりしが、稍有りて又怒に燃る聲を放ち、

「エー貴方は先ア、初て逢た其時から、私しを妻にする心は無いの、唯だ口先で妻になれ、妻になれとて、様々の優しい言葉を掛けたのですか、其時から誰だ私しを欺いて、世間の女に類も無い程の辱しめを加へ、生涯世間へ出られぬ様、社會の底へ埋て仕舞ふと云ふ、其様な恐しい了簡で有ましたか、其様な了簡で有ながら、愛するの妻になれの、又は交際社會の達者にして遣るのと、能く先ア其様な優しい言葉が口に出ました、何と私しに恨まれても一言の言譯は有ますまい、生れ立の赤兒よりも、猶世間の事を知らぬ罰の無い少女を弄び、外に其少女を保護する人の無いを幸ひに、欺て親まで捨てさせたのですか、斯様な賤い振舞をする人が、男だと云はれませうか、人間だと云はれませうか、貴方は實の世の中の最も邪慳な人よりも、猶ほ邪慳に、最も賤い人よりも、猶賤い心です、爾して私しに逢ひ、私しを欺き果せ、今日が日まで私しを辱しめて、暮して居るのを樂みだと思ひましたか、是まで

の間に唯の一度も、ア、濟ぬ事をして能く無い事だと思た事は有ませんか、貴方の仕業で私しが生涯を誤るを見て、何うか救うて遣り度いと唯の一度も思ひませんか、眞に貴方は恐しい心です、何にも知らぬ清き小兒が、井の中へ這落るを見て救ふ心の起らぬ人です、夫れ許りでは無く清い小兒を様々に欺いて、生涯出られぬ井戸の中に落し、爾して其小兒の水に溺れて苦むのを見て、樂んで居る様なものです、此様な鬼の心に神は何うして人間の様な身體を與へ、人が人間だと見誤る様にしたのでせう、餘り恐しいでは有ませんか、と非常の苦痛ば、非常なる言葉と爲り、春人の身を責るに、春人は恥入りてか其顔を擧る能はず。

「イヤ其様に云ふて呉れるな、今までとても後悔した事は幾度も有るが、唯だ愛の爲めお前と分るゝが辛いので」

「イエ罪無き者に生涯を誤らせる、其恐しい心を愛などとは聞き度くも有りません、眞實の愛ならば何故眞の妻としませぬ」

「イヤ夫には段々仔細の有る事だ」

「仔細とは、仔細とは」

「外でも無い、一通り聞いて呉れ、私と李羅嬢とは幼い頃に、親と親とで約束をした許嫁だ、李羅嬢の父是蘭伯爵は、アノ通り英國第一と云はれる大政治家、李羅嬢は又成長するに従ひ益々美人になる、夫や是やで其約束を破談にすると云ふ氣も出ず、其儘に仕て置く中、先年私がオクスフアルドの大學を卒業した時、嬢の父是蘭伯爵が故々私の許を尋ねて来て、コレ春人や己は天下の政治家として、今後五十年の中には歐洲全國の平和の基礎を固める程の大政略を計畫し、幾年以來其事にのみ一身を委ねて居るが、今の年齢で考へれば自分

一代で其政略を成就する事は出来ぬ、誰か己の死だ後に其跡を継ぎ、計畫して呉れる人が無ければ成らぬ、所か己には息子は無し、唯だ李羅と云ふ息女一人、息女では成長しても政略の役には立たぬ、幸ひ汝は李羅と許婚でも有り、何も其許婚の約束を廉に取る譯では無いが、李羅も十人並優れた女と云はれる程に育たから、汝は那れの所天と爲り、己の息子と爲つた積りで、今から大に奮發し、己の政略の後を嗣ぐ大政治家と爲て呉れ、汝に其奮發さへ有れば己が充分に能く仕込み、總て政治家に成るだけの術を教へ、己の死ぬまで汝の心と汝の身體を練固めて遣る、何うだ、爾して大政治家と爲る氣は無いか、ト斯云はれた、勿論其頃私は學校を出た許り、唯だ立身出世して功名富貴を得たいとのみ思て居る折柄ゆゑ、是ほど有難い事は無いと、充分呑込みて承知したが、今思へば夫がお前の身を誤らせる本で有た、私の返事に伯爵は喜んで、好しく夫では汝は大政治家と成る爲め、

未だ十四五年は己に従ひ、最も苦い實際の修業と云ふ者をせねば了ぬが、ヤツと學校を出たばかりで、又十四五年の修業と有ては餘り辛くて辛抱が仕切れまい、依て今から滿三年の暇を遣る、其三年を樂みの時と心得、思ふ在分に遊び樂み、最う是に堪能して再び遊び度く無いと云ふ程に成て來い、ト斯云て暇を呉れたが、私は此三年より外に生涯遊ぶ時は無いと思ひ、仕度い三昧に遊んで居た、遊びながら後々の事を思へば、此身ほど幸ひな者は無く、英國一の美人と云ふ李羅嬢を妻にして、自分は世界中の大偉人に成れると、夫が唯一つの目的で有た」

と言にくけに云來るを聞き、韋倫は唯一聲に叱り付け、

「貴方が世界中の大偉人に成れますものか、貴方は小人中の小人です。何れほどの小人でも憚る程の、賤い振舞を、貴方は憚らずに仕て居るでは有りませんか」

と罵懲す、此をさまりは猶長し。

春人は猶ほ言譯の言葉を續ぎ、

「爾して三年の遊びに取掛り、先づ手初めにブランリーの田舎に住む、友人の許へ獵に招かれ、其獵に行て居るうち、フトした遺失物の事で、初めてお前に逢たのだ、お前の美しい姿を見るより今までの約束も、是蘭伯爵の言葉も、殆ど忘れ、唯だ愛の一念で、ア、男と生れた甲斐には、何うあつても此様な美人と生涯一緒に暮さねば成らぬ、何う有ても此女の愛を得ねば、活て居る甲斐も無いと、斯思つた。決して悪氣で仕た事では無い、是だから爾吐らずに許して呉れ」

と詫入れども、韋倫の心は少しも解けず、

「悪氣で無いと仰有つても、私しを妻にせられぬ事は、其時から分つて居たでは有ませんか、私しを社會の底に埋て仕舞ひ、恥しい思ひをさせ、其上で捨て仕舞ねば成らぬと充分に分つて居ました、夫が何故悪氣では有ません」

「イヤ爾で無い、本統の妻には出来ぬが、生涯不自由を掛ぬ様にして一緒に暮せば、假令ひ外に妻と名の附く女が在ても、お前の身は安樂に、私と一緒に暮されるだらう、と斯思つた」

「悪氣で無ければ、何故夫だけの事を前以て打明けません」

「イヤ幾度も打明度いと思たけれど、打明けてはお前が承知せぬだらうと、思つたから」

「勿論、其様な鬼々しい心と知れば、何で私しが承知しませう、私しは自分で女の道に負くと思ふ事は、死でも承知せぬのです、其承知せぬを見抜き、打明けずに隠したのは、充

分の悪氣を以て私しを欺き、女の道に負く汚れた位地へ落入れたのです」

「イヤ韋倫、お前が爾う立腹しては實に困る、立腹の餘り若し、李羅嬢へでも今迄の事を打明られては、私が立身出世の道が塞がる、爾云はずに機嫌を直して、コレ韋倫、コレ」と云ひつ、其手を差延べ、韋倫の手を取らんとす。

韋倫は跳退けて、

「エ、汚はしい、再び私しの身にお障り無さるな、斯うなつては貴方と私しの間は、此世と彼世より猶遠く離れて居ます、今までは辱しめと知ねばこそ、辱められて居ましたが、知て辱めを受ける様な根性まで腐た女では有ません、今迄とても此後とても、知て悪事を仕た事は一度も無く、悪事と云ふは皆貴方の仕た悪事です、汚れは貴方の汚れです、私しの身、私しの心は今も猶ほ貴方に逢ぬ、其昔と少しも變りは有ません、貴方が私しを穢して

も、其穢れは私しの身に附かず、總て貴方の身に附きます、神に裁判せられても私しの身に少しも悪い所は無く、人に聞せても責られるは貴方ばかり、神にも恥ず、人にも恥ず、我心にも咎めません、世間の汚れた人達が神の前に顔を隠し、人の前に赤面して首を垂れる様な事は、此韋倫は致しません、ハイ自分の心で裁判しても、濟まぬと思ふは唯だ親に知らさず、親の許を忍び出た事ばかり、是とも貴方が是を貞女の道と云ひ、欺いたから仕た事で、自分から犯した罪とは思ひません、罪は皆貴方の罪、貴方は罪の爲め苦みませうが、韋倫は此上苦みません、人の前へも、神の前へも、顔を上げます、今の韋倫は昔の韋倫、ハイ少しの穢れも私しの身へは留りません」

と云ひ高く其首を擧げ、蛇蝎を見るより猶ほ賤む眼にて、低く春人を見降す様、一點罪の汚れ無き眞の人間以外の者、神の膝より降り來し、天女も斯やと思はるゝ計りなり。

春人は猶其の汚れたる聲を張り、

「イヤ韋倫、爾云はずと許して呉れ、私はお前と分れては此世を送る事は出来ぬ、今までの事は重々私が悪い、實に今更ら後悔する、此後は何とでもお前に盡し、お前の氣の濟む様にするから何うか、思直して呉れ」

と拜まぬばかりに詫入るを、韋倫は聞も入れず、

「イエ貴方の言葉は害の上に害を加へ、益々私しを辱しめる様な者です」

と強く言切は言切りたれど、唯だ女の心として、今が今まで我身分とのみ思居し身分を捨て、日當も無き此先の浮世に迷ひ入る事、如何で本望なる可きや、穢れは總て彼れが穢れ、我身に穢れ無しとは云へ、我生涯は茲に盡き、我身は再び世に出る折も無き身と成果るなり。是を思へば泣まじと思へど涙自から催し來り、暫しが程は唯だ無言にて唇を嚙めるの

みなりしが、良ありて泣聲隠す震ひ聲にて、

「貴方は眞に後悔しますか、後悔して今まで私しに加へたる罪を償えますか」

「ア、眞に後悔する、何の様な辛い事でも仕て罪を償ふ、ア、屹度償ふから思ひ直してお呉れ」

「イエ、此罪を償ふには唯一つしか其道は有ません、私しを今更ら後れたとは云ふ者の、改めて本統の妻と云ふ名に叶ふ妻として、李羅嬢との約束を取消し、私しへ妻の名、妻の權利、妻の位地を與へて披露するばかりです、其外に償ふ道は有ません、其代り貴方が爾まで仕て下されば、私しとても、今までの事は少しも口に云はぬのみか、眞底から忘れて仕舞ひ、天晴れ貞女の鑑とも云はれる程の貞女に成り、苦みにも樂みにも、總て貴方の影身に立ち、貴方の生涯を守ります、今まで二と無い此身の愛を許し、所天とまでも崇めた貴

方を、罵つて分れるのが何で快い事が有ませう、過た事は互に忘れ、其様にして下されま
すか、エ貴方、何うか爾して下されば、私しも父への言譯も有り、貴方も神に對し人に對
し一切の罪は消ます、爾して下さらぬとは仰有りますまい」

と涙と共に言來るに、春人は無言にて聞終り、漸くにして、

「イヤ、夫は出來ぬ事を仕ると云ふもの、今更ら李羅嬢との許婚を破談にし、お前を本統
の妻にすると云ふ事は、私の力に及ばぬ事だ」

韋倫は驚きもせず、

「何と私しが願つても泣いても、何うしても出來ぬと仰有りますか、爾云はずと何うか」

「イヤ夫ばかりは出來無いよ」

此恐しき返事を聞き、韋倫は餘りの事に涙も乾き、悄然と考へ入しが、漸くにして決然

として顔を上げ、

「イエ貴方の心は分りました、何も彼も是までです、唯一つ聞く事は、貴方の頼に應じ、長老の眞似をして、偽りの婚禮を扶た人の名は、何とか云ましたネ」

春人は答へ兼て控ゆるに、

「ネエ李羅嬢の名前まで私しに知せた上で、其人の名を知られぬと云ふ事は有ますまい」
春人は止を得ず、

「實は馬淵春介、と云ふのだ」

「馬淵春介、分りました此人と貴方が、私の生涯を傷けた二人です」

と最落着きし如く云ふうちにも、韋倫の怒りは以前より猶劇しく燃來りしと見え、其眉は逆立ち、其目眦は吊上り、怨に震ふ鋭き聲を一際張り、

「貴方の心が何れほど腐て居ると云ふ事も、今のお返事で愈々分りました、韋倫は眞から底から、子爵西富春人と云ふ腐た貴方を賤みます、此後の貴方の生涯は名譽も有り力もあり、幸ひも有る大政治家にも成ませうが、神の目に見る貴方の直價は、韋倫の目に見る丈しか有ません、貴方は其名譽、其力、其幸福をしながらも、生涯此の名も無く、身分も無い韋倫の賤みを逃れる事は出来ません、韋倫の此後の生涯は、唯だ此の讐を返すと云ふ事にのみ費します、私の一心は貴方に對する復讐の一心です、今見る影も無い姿をして泣ながら貴方に分れる韋倫は、他日貴方を眼下に見降し、充分に仇を返す韋倫です、私は神に誓ひ、死したる母に誓ひ、必ず此仇を復します、其時には貴方が必ず韋倫の足下に平伏し、今日の韋倫の様に泣ながら助けを乞ひ、容して呉れ助けて呉れと願ふ事に成ませう、幾等泣いても願ふても韋倫は決して貴方を助けず、許しませんから其時に思ひお知りなさい、其

時まで韋倫の此言葉をお忘れ成さるな」
 と宛も呪ふが如く言渡す、其言葉の鋭さに、春人は又も首を垂れ、其言葉の止むを待ち、再び顔を上げ見れば、韋倫は早や立去りて影も見えず、唯だ我が耳に韋倫の、
 「此言葉をお忘れなさるな」
 と云ふ聲の我身に染るが如く留りて、異様に響くを覺ゆるのみ。

呪ふ言葉を後に残し韋倫は立去りたり、春人は首を上げて見廻せども、韋倫の姿見えず、唯だ彼れの言葉のみ耳に残れり。

彼れ必ず此仇を復さんと云ひ、仇を復さんが爲に、残る生涯を費さんと云へり、眞逆に

女の力にて、我身に復讐の出来得べしとは思はねど、猶ほ何とやら氣に掛り、心穩かなる能はず、其後を追ひ連來りて慰めん者と思ひ、今しも韋倫の出去りたる其戸を開き、次の間を見渡せど其姿なく、又次の間にも姿なし、彼れは孰れに去りたるや、去るとても別に行く可き先の無き身、今にも自ら機嫌を直し此所に歸り來るならんと思ひ、凡そ一時間ほども又元の室に歸りて待たれど、韋倫は歸り來らず、益々訝しく思はるゝにぞ、或は寢間にも入りて猶ほ獨り泣沈めるにやと、又立て寢間に至り、次には化粧の間にも入れど、衣服其外少しも常に變る事なく、着替などして遠く出行きし跡も無し、更に書齋に入り見れば、白紙の眞中に何やら、認めて卓子の上に在り、取上げ見るに確に韋倫の書きし者にて、墨も猶ほ鮮かに光れるは、書きて一時間と經ぬものなり。其文句は唯だ、
 「血を見る敵」

の五文字なり。

「血を見る敵」唯短き一句なれど、何とやら物凄き意味あるに似たり、血を見る迄は恨みを忘れぬ敵なりと云ふの意か、我れ春人を刺殺して血を見ずば、復讐の念を断すとの意か、孰れにしても穩かならぬ心にして、深き恨みの此句のうちに含めるは疑ひ無ければ、春人は我にもあらず、ゾツと身震するを覚えしも、

「ナニ女など云ふ者は一時の情に心眩み、泣く時は我を忘れて泣き、怒る時は前後も知らずに怒るけれど、其代り又打解けるも早いものだ、今に歸て来るだらう」

と又斯く自ら思ひ直し、出て下僕の居る所に行き、若し韋倫を見ざりしやと問ふに、

「イヤ最う一時間も前に裏口から出て、川の方へお出になりました」

川と聞きては、若しや身投に有ぬかと危む心も出たれど、血を見る敵と名乗る程の恨みを

以て身を投る筈も無く、川と云ひても橋ありて、橋を越ゆれば何處までも行かれる故、又強て自ら慰め、今に歸り来るならん、今に、今にと、云ひながら日を暮せしも終に歸らず。二日を経、三日を経、更に何の音つれ無ければ、春人は漸く眞面目に心配する事と爲り、血を見る敵と云ふ言葉の、益々容易ならず思はるゝに至りしも、今更ら何と詮なき事、唯一つ何より辛く感ぜらるゝは、今まで此家の内を照し、我が身の上を照したる、最と美くしき其顔の見んと思ふも、復た見るを得ぬ一事なり、今までは韋倫の顔、何時にても見らるゝと思ひたればこそ、如何ほど其顔が我身を慰むるやを知らず、又此家に歸る度必す韋倫の顔を見しが爲め、如何ほど韋倫が此家を楽しくせしやを知らず、我身は何時も斯く晴やかに、此家は何時も斯く樂き所とのみ思ひ居たるも、唯だ韋倫の笑顔の見えぬ丈にて、此家は何とやら火の消し暗の如く、我が一身は味の無きこと蠟を嚙むに似たり。

ア、我身は斯までも韋倫を愛し居たるか、韋倫は斯までも我身に大切なりしかと、思ふほど益々物足らぬ心地して果は食ふ物までも味を覺えず。

扱は、扱は、韋倫の請ひし通り辛くとも李羅嬢と破談して、韋倫を生涯の我妻と定むること我身の幸ひなりしか、李羅嬢に逢はずしも我が身は何の苦痛とも思はぬに、韋倫無くては此後の永の年月が何うして送らる可きやと、急に浮世の大儀なるを覺ゆれど、是も亦詮方なし、寧の事此家を疊まんか、此家は韋倫の爲に借たるもの彼れ居されば、家ばかり何かせんなど、獨り考へは考へても、猶ほ其心に、イヤ／＼韋倫、何時歸る事あるも知れず歸れば直に本の如く此家の主人と爲る故、兎に角も今一年は此儘に、下女をも下男をも置きて存し置かんと、漸くに決心し、是より一年ほど此儘に爲し置きしも、終に韋倫は歸り來らず、嗚呼韋倫は如何にせしや、血を見る敵、如何にして血を見るや。

話更る、入ては一國の大臣と爲り、出ては一黨の首領と仰がれ、社會の幸福、列國の安危、總て其一身に繋り、威名赫々として一世に輝くもの、是蘭伯爵の如きは亦稀なり。

伯が政治上に身を委ぬる、茲に數十年、非常の身代と非常の威勢とを備へて、爲す事一として意の如くならぬは無きに、敢て贅澤なる樂みに耽らず、宛も小兒の遊ぶ如き質素なる樂みを無上の樂みとし、其外は總て政治にのみ心を寄せ、する事爲す事、政治の掛引ならぬは莫し。

伯の自ら或人に語りし言葉に、余は時々自ら怪む事あり、余は何が爲め自ら政治の事に忙しく世の人の半分ほど安樂を得ず、身を勞し心を勞してのみ一世を終らんとするや、

ア、余は自ら萬世までも滅せざる、一種不朽の文字を以て英國の歴史に是蘭伯爵と云ふ名を書記し、萬々年の後までも是蘭の名を忘れざらしめん爲なり、政治は余が名を書記す文字なり、と云せる事あり。

是ほどの心掛なれば、一刻も政治の事を忘れぬは實に當然の事とも云ふ可く、今は其望み大方達して、伯の一言一行は電報にて世界各國に傳へられ、伯の寫眞は孰れの家の座敷にも掛られて尊敬をらるゝ迄に至りぬ。

今しも伯は政廳より歸り來り、餘念も無く調物に取掛り居たるが、何やら思ひ出せし如く椅子より離れて深く考へながら室の中を一週し、頓て呼鈴に手を掛けて推し、ハイと應へて入來る從者に迎ひ、

「李羅子は最う出たのか」

と問ふ、

「ハイ馬車の用意まで出來て居ますが、未だお出掛には成しません、今夜の夜會も嬢様の爲に定し賑ふ事だらうと思はれます」

「では出掛に一寸と己の室へ立寄る様に云ふて呉れ」

從者は畏みて退きしが、五分間も経たるかと思ふ頃、絹服の音爽かに入來るは會て韋倫が春人と同じ馬車に相乗せるを見し彼の李羅子なり、李羅子は父の前に立ち恭々しく、

「日々のお忙しさに定しお疲れと存じます、貴方も今夜私と一緒に出席下さるの」

「イヤ別に政治上に興味の無い夜會で、己だけは最う斷つて遣たから、和女獨りで行くが好い、オ、大層服装が能く出來た」

と殊の外満足の體なるは、木石かと疑はるゝ大政治家にも、子を思ふ心は又別なるべし。

「又此様な色の服を是蘭好みなど名を付けて、仕立屋が廣告するかも知れませんか」
「爾される丈け和女の徳を増すと云ふ者、兎角人望が肝腎だから」
「時にお召なされたのは、何が御用で御座いませうか」
「イヤ少し話し度い事が有る、先アお据り」
「イエ、据ると直に着物の膝に敷が出来ますワ、斯して伺ひませう」
と云ひ、嬢は椅子の脊に手を寄せ、半ば其身を低くしたれど充分に腰を卸さず。
伯爵は静に考へ乍ら、
「兼てから彼の西富春人と和女の間、親と親との取結んだ、約束の有る事は和女も知て居るだらうか」
「ハイ」

「ナニも親の威光を以て、無理にアノ約束を守れとは云はぬ、云はぬが和女の心で守れると思ふならば、最う徐ろく實行に取掛る時が来た、己の目で目下の青年社會を見渡した所で、春人ほど容貌の立派な男は無い、彼ならば大事の息女の婚夫にしても聊か不足は無いと思ふ、殊に彼れ政治家に必要な才智も備り、度胸も充分有る様子で、彼れならば此後の仕込次第で、随分己の政略を繼ぐ事が出さやうと思ふが、併し、何よりも先づ和女の意見が大事と云ふもの、和女は彼れを何と思ふ、昨年中は一緒の馬車で度々散歩にも出、又芝居などへも行ったから、大抵彼れの氣質も分つたらうが、随分所天に持ても好いと、斯思ふか」
嬢は最と打開ける女なれど、少しく其頬を赤くして、
「其様な事は、未だ考へて見ませぬが」

「夫とも和女の心に春人よりも猶は好な男でも見立て有るのか、春人を罷めて此人を所天に仕たいと云ふ様な」

「何で其様な人を見立ませう」

「好し、好し、外に春人より優ると云ふ見立が無ければ、彼れと夫婦に成れぬと云ふ筈は無な」

伯は外交的談判の口調にて、先づ一段の局を結び、更に百尺等頭に一步を進めて、

「和女の心で夫婦に成られるとして見れば、何も此上猶豫するには及ばぬ事だ、今夜定し彼れと夜會で一緒に成るだらうから、和女も能く己の思惑を呑込んで、成る可く其積りで仕向るが好い」

嬢は笑顔と爲り、

「仕向るとして、何の様にするのか私しは其様な事は知りませんもの」

「イヤ彼れに、最う婚禮の事を言込でも好い時分だと、斯思はせるのサ」

「何うすれば、爾思ひます」

「何うすればとて、此様な事が口で教へられる者では無い、少し交際に慣れた女は、能く其の呼吸を知て居る筈だ」

「でも私しは、知りませぬもの」

「ナニ彼れも最う年頃で、此兩三年大抵、人情も知り盡した筈だから、充分和女の心を讀む、何も斯する、彼れすると云ふて、大した事をするに及ばぬ、唯だ目附だけで好い、唯だ言葉の言様だけ、唯だ素振だけでも好いのだ、目附にでも言葉附にでも、少し素振の變つた所が見えれば、彼れは最う直に悟る、是だけの事が出来ねば、交際家とは云はれぬ、ナ

ニ易しい事だ」

「私しは貴方が常に六かしいと仰信る、外交術とやらより、猶ほ六かしいと思ひますワ」
伯は機嫌能く打笑ひ、

「ナニ爾六かしくは無い、今夜先づ試みて御覽ん、爾すれば一週間を経ぬうちに、春人から必ず婚禮を言込で来る事に成るから」

「其様な素振をして、令嬢の身分に障らねば」

「ナニ障る者か、外の人へは分らぬ様に、其人だけへ思ふ素振を悟らせる事が出来ねば、眞の令嬢とは云はれぬ、目附でも言葉附でも夫は唯だ臨機應變だ」

嬢も亦笑ひながら、

「此様な六かしい用事を言附りましたのは、今夜が初めてです」

と云ひ更に又、

「思ふ通りに出来無くとも後でお叱り成さらぬ様に」

とあどけも無く斷りつ、父の頬に小兒の如く接吻して立去れり。伯は其姿を見送りて、

「是も國家的經論策だ、必ず功を奏するだらう」

と呟きたり。

此夜李羅嬢が招かれ行きし夜會と云へるは、當時英國第一の交際家と知られたる、ダンモア夫人が大陸の旅行を終へて歸りたる、其の披露として久々に開きたる者にして、英國の上流と目指さる、紳士貴夫人は、洩なく之に臨みたり。

宵の中より集ひ来る人々は、早や大廣間に略々満んとする頃、其一方の隅に立ち、満場を見渡して彼れ是れと評し合へる三人の紳士あり。

其の一人は彼の西富春人なり、甲紳士は今しも入來りし李羅嬢に目を注ぎて、春人の袖を控へ、

「サア來たぜ、僕が今まで最近八十年來に二人と無い美人と評した、是爾伯爵令嬢李羅子か」

と云ふに、春人は彼れより先に目を留めたるもの猶ほ氣附かぬ振を爲し、

「何所へく」

と云ひて、甲紳士の指示す所を見、初て夫と知りし如く、

「成るほど來たな、美しいネエ」

と云ふ、乙紳士進み出で、

「本統にアノ様な美人は非作りだ、今夜の此席にも、己ならば随分嬢の所天に成れるだらうと、内々望みを屬して居る紳士が、少くとも五十人は有るだらうが、其中の一人が望を達すれば、残る四十九人は失望する、唯だ一人に最大幸福を與へて残る四十九人に、最大不幸を與へるはアノ様な美人だよ」

「何も不幸を與へると云ふ譯では無い、先は與へも何もせぬのに、此方で不幸を招くと云ふ者サ」

聲の切れぬに甲紳士は打叫び、

「ヤ、ヤ最大幸福、最大幸福、最大幸福、見たまへ李羅子が人懐しけに室中を見廻して居る事を、アレは必ず最大幸福を與へる積りで、其人を探して居るのだぜ」

「成る程爾だ、右の隅を眺めて居るがアノ邊には、最大不幸の人種が殖民して居ると見え、ソレ視線が段々我々の方へ轉じて來るワ」

云ふうちに李羅子は、此一群に目を注ぎ、初て見認得しと云ふ如く、ニツと笑、默禮の意を示せしは、是れが父伯爵の言含めたる素振とも云ふ可きか。

春人は唯是だけにて、早や腹の中に含くに、甲紳士は躍起と爲り、

「オ、最大幸福の其人は僕だよ、拙者だよ、誰あらう斯く申す某だよ、見たまへ嬢が僕を見留めて、愛嬌の溢れる程に目配した」

「夫は僕と並んで居るから、僕に注いだ愛嬌が君の方へ溢れたのだ、兎に角嬢の傍へ進み出て、決選投票を受やうぢや無いか」

と動搖めきながら三人にて李羅子の方に進み行くに、近よるに従ひて、嬢の愛嬌は唯だ春

人にのみ注げる事を見れば、

「何だ馬鹿くしい、僕ぢや無い西富子爵だ」

「成るほど爾だ、結局僕が最大不幸の第四十九番目に當るのか」

「僕が第四十八番目だ」

と云ひ、人知れず兩方より春人の脇下をくすぐりて分れ去りたり。

春人は二人に分れ、唯獨り李羅嬢の前行き、兼て懇意の間柄とて笑ひながらに、

「今夜は幾番、私と踊つて下されます」

と云ふ、嬢も最と心安けに、

「幾番でも貴方のお望み次第です、外に未だ之と云ふ約束が有りません」

「望み次第と有れば、私と許り踊つて、外の人とお踊り成さるなト斯願ひ度く成ります

が、早や方々に貴方を熱心に見て居る人が有ますから、夫では私しが憎まれます、我慢に我慢をして雙舞を二組願ひませう、二組踊つて下されば今夜出来る丈の仕合せです」

嬢は寧ろ其望みの少きを恨むかの如く、

「オヤ唯つた二組、貴方のお望みは夫だけで満足なさるのですか、大層満足し易いものですネ」

「イヤ此上の望みは大變な大望です、貴方が云ふなど仰有つても、折を見て申さずには濟されません」

と云ひ、更に低き聲にて

「外の人の間かぬ所で」

と繼足して此所は分れたるが、是丈の言葉に双方とも言外の意味を運びしなる可し。

是より幾時も経るうちに、満場入亂れたる踊りと爲り、踊りの間には銘々に場所を求めて休み、休みては又踊るなど、我も人も夢中に入りて興する頃、同氣相引き、求めずして自づと茲に至りし者か、春人と李羅嬢は舞踊室より稍離れし、盆裁室の最靜なる所に落合ひたり。

「オヤ李羅子さん、貴女も茲に」

「ハイ西富さん、貴方も」

と怪み合ふは上部にて、實は心に茲ならば逢れる事も有らんかと、互に思合ひし爲なる可し、春人は先づ傍の腰掛臺を引きて李羅子に與へ、己れも其の前に座し、膝と膝との突合まで薄寄りて、

「到頭大望の口を切る時が來ました、李羅子さん最う私しの心が分つたでせう、昨年から

貴方のお許しを待て居ますが」

「許しとは」

「イヤ、兼てから親と親とで取結んだ約束とか、有る爲に、斯う云ふのでは有ません、眞實に貴方を愛し生涯を共にしたいと思ふから云ふのですが、貴方は今まで何とも此事を考へた事は有ませんか」

と問ふうちにも春人の胸の中には、自から先年小川の岸に韋倫と斯く並び座し、斯る事を語り合たる時の様を思ひ出さぬ事能はず、其時と今の様と實に一方ならぬ相違あり、其時は燃立つ如き愛の爲めに、胸も騒ぎ言葉さへ思ふ様に出ざりしも、今は我心に此女に向ふ愛あるや無きやすら、充分には知る能はず、唯だ出世の道と思へば半ば勤めの心にて、愛の言葉を語るのみ、李羅嬢の様子とても彼の時の韋倫の様子と、亦何等の相違ぞや。韋倫

は愛の外に一物の有るを知らず、我が言葉の爲に泣き、我言葉の爲に喜び、我が一言は深く心の底より出て彼れの心に入り、彼れと我れと唯だ一身同體の如く、須臾も離れななく想はれしも、李羅嬢は我言葉に喜ばず、我が思ひに動かされず、親きうちにも我れと全く別々なる所ろあり、我が妻たらんを待つに似たれど、一身同體に融化せず、唯だ親みと云ふ丈にて愛と云ふ者の有る無しさへ分らぬに、斯る冷かなる婚禮にて、眞に生涯が幸福に送らる可きやとは、春人が心の孰れにか在りて掃ふにも掃ひ難き感じなり、眞に愛したる韋倫には分れ、夫ほど迄に愛せざる李羅子と生涯を結び合す、是も我が心柄にて何と無く穩かならず。

春人は既に其眞の愛を韋倫に費したる後なれども、李羅子に取りては實に今までに初ての大事なり。李羅子は平常最と落着き、最と打明けたる質なれども、此場合に臨みては、更の如く心騒ぎ、頓には返事も口に出ず、斯る折しも外の方に足音あり、
「是蘭嬢は何所へ行たゞらう、僕と此次の踊りを約束して有るのに」
と尋ぬ來る聲の聞えしかば、李羅子は六かしき位置より救ひ出されし心地にて、
「此話しは又緩々と仕直す事に致しませう」
と云ひて立上り、春人は本意無さに堪ざれど、是れも亦詮方なければ、
「孰れ更めて伺ひます」
と云ひて立たり。

固より李羅子が其父伯爵より受たる命は、婚禮を取極よと云ふに有らで、最早や口切り

て好い頃と、春人に思はしめよと云ふ丈の事なれば、李羅子は是にて父の言附だけ果したる者と思ひ、踊を終りて家に歸りし上、父伯爵に有し次第を詳しく語るに、
伯爵は満足し、

「イヤ夫だけで澤山だ、斯まで運べば明日にも春人が婚禮を言込で來るだらう」
と云ひしが、果せる哉、翌日は彼れ午前内に來り、嬢に面會を求めたり。

嬢も平生よりは、幾何か氣を附けて身を飾り、客室に入りて彼に逢ふに、彼れは昨夜の緒口を繼ぎ、切に我れを愛せざるかと問ひ、又我を愛せよと請ひて止まず、嬢は昨夜の考へにて、心も大に定りたれば打騒ぐ氣色も無く、唯日頃の打明たる調子にて

「夫は仲々六かしいお問です、愛せよと仰有つても、愛が商賣の品物か何ぞの様に、ハイ夫ならと云て心の起る者では有りますまい」

と笑ひ乍らに答へ、更に最と眞面目に成りて、

「併し私しの心は、未誰に向ひても愛と云ふ者の出た事無く、是から追々出る時分だらうと思ひますから、此愛を貴方が自分の身へお引附成さるるのは、唯だ貴方の此後の勉強次第です」

春人は恨しげに、

「夫は情無い事を仰有る、此後の勉強とは、何うすれば好いのです」

「イエ、貴方ならば充分氣心も分つて居ますゆゑ、此後私しの心に愛さへ出れば、随分私しの所天にしても好い方だと斯思ひます、唯だ私しは、心に思ふ丈の事は云はずに居られぬ質ですから、何も彼も云ますが、不正直な人は大嫌ひです、又嘘などを云ふ人は大嫌ひです」

嘘と云ふ語は少し春人の胸に答へしも、其氣を見せず、

「夫は誰とても同じ事です、私しが何で不正直の事をしたり嘘を言たり致しませう」

「ハイ其様な事を爲さらぬ方だから、夫で愛さへ起れば所天にしても好いと云ふのです」

「イヤ夫だけのお返事では未だ足りません、屹と其愛を起し私しを愛すると仰有つて下さらねば」

と云ふ中にも熱心の色充分に現れたり。

春人は既に前約の有る事と云ひ、且は昨夜の素振と云ひ、自分より口さへ切れば、直に婚禮の行はるゝ事とのみ思ひしに、仲々嬢に奥深き所あり、容易に應ず可しとも見えざるよ、今は何うしても嬢が心を動かさずばと、却て眞實の熱心を起せしなり、眞實の熱心には嬢が心も稍や動き出せしか、嬢も益々眞面目なる様子と爲り、

「イヤ貴方は唯だ親と親との約束が有る爲めに、夫を守らねば成らぬと思ひ、外に愛する女が有るのに夫を捨て其様な事を仰有るのでは有ますまいネ」
我心を見抜しかの如く問はれて、春人は我が顔の火よりも猶熱きを覚え、返事も咽喉に支ゆる程なりしも、漸くにして聲を出し、
「決して其様な譯では有ません」

「イエ何も妻たる者が所天の事を、残らず知らねば成らぬと云ふ譯は有ませんけれど、夫婦と爲るには互に今までの事を打明し、少しも暗い所の無い様にした上で無ければ、成るまいと思ひます」

「勿論です、勿論です」

「暗い所を隠して置いて、爾して妻を求めるといふほど罪な事は有ません、妻の方では此人なら生

涯の所天に出来る者と、充分信じて一生を托しますのに、所天が前以て心を外へ許した様な事が有り、夫が婚禮後に現れては夫こそ妻の生涯を誤る者に當りますから」

と言來る言葉の節々、宛も韋倫の恨を其儘に述來るかと思はるゝ程なれば、春人は益々其身の罪深きを感じ、殆ど顔色の變らんとするを防ぎ兼ねる許りなれど、又思へば、思慮ある女が婚禮に先立て、斯る事を問ふは當然の事なれば、茲が大事と必死になり、

「私しに限りて、決して其様な事は有ません」

「では今まで、外の女を愛した事は無いと仰有りますか」

「ハ、ハイ」

「夫とも幾等か有ますか」

「有ません、イヤ那の女はト多少心を寄せた様な事は有ても、皆若氣の妄想と云ふ者で、

三日と経ぬうちに忘れて仕舞ひました、全くの忘想だけです、決して眞面目に貴女を愛する様に眞實愛した事は、一度も半分も決して有ません」

此言葉を若草倫に聞かせなば、我を何とか云ふならんと、斯るうちにも斯る想ひ胸に浮びて、益々穩ならぬ所あるは、己が犯せし其罪の報と云ふ可し。

「では私しが貴方と婚禮するにせば、私しは白紙より猶ほ清い一點の汚れの無い所天を持つのですネ」

「勿論です、勿論です」

「イエ貴方が爾まで仰有れば、此上何も引延すに及びません、貴方と夫婦の約束を致しませう」

春人は嬉しさに堪へざる如く、

「眞に貴女は私しの生涯の寶です、私しの一生は、唯だ貴女の身を幸ひするのみに費します」

「其代り今婚禮すれば、貴方は自分を敬ふのみで、未だ自分に對し充分の愛情の起らぬ妻を持つ者と思はねば成ませんよ」

「イヤ未だ眞の愛情が無いにしても、妻と爲れば私しの實意で其愛情を起させます、ハイ愛せねば成らぬ様に、充分の親切を盡します」

と殆ど叫ぶが如くに言ひたり。

漸く李羅嬢に婚禮を承知させ、春人は嬉しさに堪ざれど、忘れんと思ふほど益々草倫の

事を思ひ出し、李羅子の代りに若し韋倫を斯の如く妻とし得ば、如何ほどか幸ひなる可きやなど思ひ我知らず、深き嘆息をも發したり。李羅子は耳早く聞咎めて、

「オヤ貴方は何が氣に掛けて、其様に嘆息など發します」

春人はハツト驚きて我れに歸りしも、既に遅し、

「イヤ何に、嘆息と云ふ譯では決して有ません」

李羅子は少し不興氣に、

「早や私しにお隠し成さるのですか」

と問ふ、春人は益々窮し、漸くに然る可き言譯を案じ付き、

「實は亡き母が此世に居て、私しが斯まで立派な妻を持つと知たならば、何れほどか喜ぶだらうと、斯思つてツイ溜息が出たのです」

と言消したれど、猶何とやら解遣らぬ所あるに似たれば、更に其機嫌を取らんとし、李羅子の優しき手を取上げて、

「李羅子さん斯う夫婦の約束が定まれば、何事が有うとも此約束の破れぬ様に、接吻を以て固めねば成しません」

と云ひつゝ、薄寄らんとするに、李羅子は其顔を赤くし、微に唇頭を震して其身を退き、

「イエ夫は出来ません、私は父より外の人と接吻した事は有ません」

ア、此返事、韋倫と何等の相違ぞや。

「イヤ父上より外の人と接吻しては夫こそ大變ですが、夫でも夫婦の約束が定れば接吻せねば成しません、夫が濟まねば、何だか許婚に成た様な氣が仕ません」

と云ひ再び身を薄寄するに、李羅子は殆ど女皇が其臣下を制する如き、最と氣高き身振に

て春人を制し、

「私しの云た事を忘れましたか、私は思ふ儘を飾らずに打明て貴方を敬ふけれど、未だ眞の愛情は出無いと云ました、接吻は眞の愛情の起る時までお預りに致します」

是が夫婦の間なるか、斯云はれては其言葉に従はねば成らぬかと思へば、春人は再び溜息の洩るゝを制し得ず、唯纔かに、

「では成る丈け早く其時の來る様に、勉める外は有ません」と云ひて止みたり。

此年の八月に及び愈々是蘭伯爵の邸にて、婚禮を行ふ事と爲りたるが、伯爵は一世の晴とし、皇族をまで其席に請待する運びを附け、古來其例も無きほど最と盛なる用意を調へたり、去れば子爵西富春人と、是蘭伯爵令嬢李羅子との婚禮は到る所の評判と爲り、孰れ

の新聞も之に關する記事を以て毎日其幾段を埋め、李羅子の許へは所々方々より祝意を表して、様々の贈物を寄せ來るもの引も切らず、云れど茲に一つ新聞紙も探り得ぬ一事件あり、开は愈々今日が婚禮と云ふ其朝に至り、郵便にて贈り來し數多き進物のうち、一つ黒き紙にて封じたる小包あり、黒き封皮は死人の知せにのみ用ふる習ひなるに、婚禮の日に之を受るは誠に忌はしく思はれて、深く李羅子の氣に觸りたれば、中に何物を封じ有るにや、又何人が寄越せしにやと、李羅子は殊更に封切りて檢むるに、贈り主の名は記して無し、品は最小き短劍にして其刃は銀にて製し、其柄には眞珠を嵌め、留針として襟などに挿し得る様に作りしものなり、成るほど新奇の形なれども、名を聞かさへも恐しき殺人劍、何の意にて贈りしにや、猶能く見れば其劍に細かなる文字ありて、

「血を見る敵」

と刻付けたり。

李羅子は此文字を讀みて、身のすくむ程ゾツとしたり。

「血を見る敵」

世に是ほどの恐しき言葉が又と有る可きや、何さま我身を怨み憎む人の仕業なるに相違なし、我身は絶て人より憎まるゝ如き事をしたる覺え無きに、何の怨み何の遺恨、怪さの限なれど、兎に角此婚禮に付ては、目に見えぬ敵ある可し、用心せずば有る可からずと、殆ど安き心も無く、誰にも知らさず此短劍を深く化粧匣の底に納め隠しぬ。

頓て定め時間に至れば、春人と李羅嬢と其式場なる定め寺に至り、神卓の前に立たれど、花嫁花婿兩人とも、他人の想設けし程嬉しけなる様子見えす、殊に春人の顔の色さへ青醒めて、痛く氣に掛る事ある如く、長老が夫婦の誓を讀み聞せる間際にも、不安心氣

に背後を向き、落着かぬ眼にて見廻したり。彼れが心には、今も猶ほ韋倫の「此言葉をお忘れ成さるな」の一言深く印して、忘れんにも忘れ得ず、此盛なる式に臨みては、韋倫と行ひたる偽りの婚禮目先に浮び、若しや斯るうちにも韋倫が復讐の爲め、群集の中に現れて來はせぬか、若しや花嫁の手を引きて歸る途中に、彼れが待伏せるに非ずやなど、我より招く心配の自と顔に現はるゝのみ、若し春人にして能く韋倫の人柄を考へ見、彼れが眞實に生れ乍らの貴夫人にして、世の貴夫人も猶ほ及ばぬほど美しき心根なるを思へば、彼れが耻をも忘れて人込の中に現はれ、俗界の男女が怨み合ふ如き、端下なき復讐を企むに有らぬは明かなるに、夫をさへ思ひ得ぬは、唯だ己が犯せし其罪の最深きを感じるが爲なるべし。

愈々婚禮の式終るや、春人は逃るが如く新婦と共に馬車に乗り、其日直ちに蜜月の旅に

上りたるが、此夜に及び李羅子より、初て彼の物凄き贈物の事を打明け、
「此度の婚禮には、必ず目に見えぬ敵が有ますよ」
と云ひたるに、春人は顔色土の如く變する迄に驚きたれど、最早斯なれば詮方なし、何事
ありとも我力を以て充分に新婦を愛し、新婦を保護するの外非すと決心し、然る可く言消
して李羅子を慰めたり。

二四

春人、李羅子と婚禮して蜜月の旅に上りし其間に、彼の憐む可き韋倫は如何にせしぞ。
人窮すれば父母に叫ぶとかや、身の措處無き迄の深き悲みに沈みたる韋倫の如きもの、
父母の家より外に行く所あらんや、殊に韋倫は其の自ら云ひし如く、假令ひ其身は偽りの

一 代

爲め瀆されしとは云へ、我れより罪を犯せしに非ず、唯だ偽りに欺かれたるのみにして心
に何の汚れも無し、神の前、人の前に恥て首を垂るゝ如き事もせざれば、父に顔合されぬ
不面目も無し、心に堅く我が清きを信する爲め、春人の別荘を出てより直に父の家を指し、
汽車に乗りたり。

汽車のプランリーに着くと共に、幼稚親みの野も山も、笑ひて我身を迎ゆれども、悲し
みに沈む身には物思ひの種と爲り、涙の先立つを覺ゆるのみ、涙を浮べて父に逢ふは罪を悔
て歸來し如くに見え、罪なき身には有まじき事と思へば、先づ涙の有るだけ泣盡し、其上
にて歸らんものと、直ちに母の墓に詣で、墓前に伏して生たる人に語る如く我が不幸なり
し次第を述べ、今まで堪へ居し悲さを一時に發し、泣きては語り、語りては又泣くに、漸
く涙の種も盡きしか、心も次第に落着きたれば、日の暮頃に及び我家に歸るに、家内何と

無く物靜にして、座し慣し我が居室の窓には白き布を垂れ、我身を既に亡き人の數に入れしかと疑はれ、父の書齋にも父有りや無しや見極め難し、闕を跨いで内に入れば、其後に雇入れしか顔知らぬ小女出來り、

「何の御用ですか」

と問ふ、我家ながら人の家に似たり、韋倫は先づ、

「祖母さんは、お居間に居つしやるの」

と問ふに、

「此家の祖母さんは、去年の暮に亡なりましたが」

扱は我が心柄とて、其死際の介抱もなし得ざりしかと、自ら我身を責むる折しも、

「オヤ韋倫の聲に能く似て居るが」

と云ひ次の室より馳出で來るのは父の團墩氏なり、韋倫も馳寄りて、

「オ、阿父さん？」

と云ふうちに胸一ぱいに悲さの迫來るを、ヤツと堪へ、

「唯今歸て参りました」

と云ふ、父の歡びは譬ふるに物も無く、

「オ、歸つたか能く歸つた、先ア立派な奥方に成た事は、何れ窓の方に向き美しい其顔を見せて呉れ、定し己が美術館に出した那の畫を見て、父が心配して居ると知り歸て來たので有う、成う事なら毎までも茲に居て呉れ、所天も一緒か、許しを得て一人で來たか」

と韋倫に返事の暇も與へず、様々の事を問掛るは、嬉さ餘りての事なるべし、韋倫は父が心の稍や落着くを待ち、

「イエ阿父さん、私しに所天は有ません」

「ナニ、所天が無い、——死分れたのか、ヤレ／＼可哀想に」

「イエ初から所天は無いのです、婚禮を仕無いのです」

「何だ、婚禮せぬ、だつて婚禮をしようと云ふ手紙を残して有たちや無いか、定立派な婿を連れ、今に歸て来るだらうと、夫ばかりを樂みに今まで堪へ居たのに、婚禮もせぬ、所天も持たぬ、祖母さんも和女と婿との事を言暮して、お亡なり成れたが」

「イエ阿父さん私しに所天の無いに就ては色々仔細の有る事です、夫をお話しに歸て来ました」

「ドレ話せ、何な話だ早く聞せて呉れ、己は氣に成て、氣に成て、だけれど己が心配する様な話では有るまいな」

「茲では話も出来ません」

「書齋へ来い、己の書齋へ」

眞に親子の情は是ほどにも強き者か、父は一言の韋倫の家出を叱らんとはせず、地にも置かぬほど騒ぎ立て、早速其の書齋へと連れて入り、人形でも据らせる如く椅子に据ゑ、顔を其前に差出して、

「ドレ話しとは、サア聞せて呉れ」

韋倫は震へる聲にて、

「阿父さんが聞けば定めしお驚き成さらうが、私しの話と云ふは今まで女の口から出た事も無い程の恐しい話ですよ」

と云ひ置きて、我身が男の薄情に欺かれし次第を残らず語るに、父は青くなり赤くなり、

話しの終るを待兼ねて、

「爾して其男に罰も當らず、今も猶ほ生て居るのか、嘆くな娘其様な人非人は己が殺す、己が其仇を復して遣る」

と云ひ、早くも飛出さん劍幕にて、

「其男の名は何と云ふ、誰だ、何處に居る」

と問掛るにぞ、韋倫は様々に制し宥め、

「イエ阿父さん、欺かれたのは私ですから、此仇は私しが返します、自分で欺かれた上に、其仇まで貴方を煩はす様な事が有ては私しが濟ません」

と云ひ、何と問はれるも春人の名を明かさず、終には父を説伏しが、韋倫の心にては斯る至盡の怨をば、人の手を借り晴しては我が心癒るに足らず、何うしても我が身一人にて仕

遂げ得んと思へるが爲と知らる、父は仲々聞入ざりしも、韋倫が其名を明さぬに詮方無く、追々に問落せば其中に知る由も有らんと思直して、此場だけは韋倫の心に随ひたり。

二五

韋倫は猶も我身の復讐は唯だ我身一人にて何人の力をも借らず、又何人にも知さずに果さんと決心を父に告げ、漸くに承知させたれば、我が指に今も猶ほ環めて有る、彼の偽婚禮の指環を脱きて父に渡し、最早や身に着くも汚はしき品なれど、復讐の一念を忘れぬ爲め保存して給へと云ひ、其代り復讐の事終らば直に此指環を捨る故、我身が再び此指環を父の手より受取る時は、即ち復讐を遂果せて此指環を相手に返すの時なりと思はれよと云ふに、父は恨めしげに其指環を持ちて齒切りせしも、韋倫の言葉とあれば唯の一度も

聞入れぬ事の無き父なれば、頓て其意に従ひ、指環は堅く紙に包み、表に「悪人の記念」と書記し孰れにか納めたり。

吁韋倫は如何にして仇を復する所存なるや、復讐とは口に言ふは易くして行ふは最と難し、往古より生涯復讐に身を委ねて、其目的を達し得ずして死したる者幾人なるを知らず、韋倫は實に復讐の難きを知り、我身生涯復讐の手段を求め、終に得ずして死するとも、此決心を動さじと窃かに誓へり、今は是と云ふ工夫は無きも、求めて止まざれば終に其工夫あらんと、堅く信じて疑はず。

是より父の家に留りて、唯だ復讐の時をのみ待つうちに、其時は來らずして春も秋も空く過ぎ、終には春人の婚禮さへ聞く事と爲りたれば、罪を犯せし其人は榮え行き、犯されし我身は益々日蔭に埋れ行くかと、悔しさ恨しさ又一入を加へたれば、迫ても心遣に「血

を見る敵」の短劔を李羅嬢に贈りたれど、其後は夜も落々と眠られず、火宅に座したる思ひにて、此世の樂みと云ふ者更に無く、内に入るも外に出るも、見る者總て昔し春人と岸沿に座せし様など思出す種のみにて、我身は夫が爲め日々に衰へ、鏡に向ふ度毎に我顔の彌が上にも悲けなるに打驚く程なれば、此上一年も茲に居ては我命續かじと思ひ、或時父に向ひ、孰れにか轉居せんと言出せしに、父は疾より韋倫の悲けなる様を見て、獨り此後を心配する折なりしかば、喜びて承知しつゝ、

「イヤ韋倫、夫には何よりも好い事が有る、實は父の畫を殊の外最負にする當國一の貴族、五田公爵が數年前より父に迫り、伊國羅馬府に在る別莊の室々を彩色して呉れと云はるゝが、別莊とは云へ實はスベロル宮と人に知られし王宮と同じ程の城廓だ、室内の彩色を仕直すには一月や二月では仲々出來ず、一年ほども羅馬へ出張せねば成らぬから、父は今ま

で断つて居たけれども、和女が爾う云ふ願ひなら、直に公爵へ兼てのお頼みを承知したと云ふ手紙を送り、萬端の打合せを済めた上で和女と共に出張しやう」と云ひ其日の中に公爵家に手紙を出し、娘をも連れて行き度しとの事まで書添へしに、日ならずして公爵より一方ならず満足の返事來り、許多の旅費まで送り越したれば、韋倫は父に連れられて直ちに伊國へ向け出發したり。

五田公爵とは人も知る英國にて、皇族にも續く程の家筋にして、其當主公爵は既に四十の上に近いけれど、十餘年前に美徳璃と云へる最愛の妻を失ひ、其後は唯だ此世を懶しとして、再び妻を迎へず、其非常なる身代にて唯だ慈善と美術とに心を寄せ、我が爵さを紛らせて世を送れり、其の羅馬府の別荘スベロル宮と云へるは、伊國第一とも云はるゝ古宮城にして、實は公爵の妻たりし美徳璃夫人の生れし家なり。羅馬府には殆ど用も無き公爵な

れど、其の古宮を立派にし、大金を抛ちて修復せんと云ふは、美術を愛するとの言立なれど、實は死したる妻を思ふの心猶止まず、夫人美徳璃の記念にせんが爲と知らる、抑も夫人美徳璃は、伊國第一の貴族バラツゾ公が老年に及び、初て儲けたる一女にして、五田公爵が昔し同國に遊びし頃、思ひ思はれて夫婦と爲り、英國に來りしも風土の其身に合ざるため、廿三歳を一期として古郷なるスベロル宮の事を云暮して死し、其家筋も亦夫人美徳璃と共に絶え、後を嗣ぐ者無き事となりしかば、其古宮は妻の財産として五田公爵の手に歸せし者なり、公爵は夫人美徳璃の死してより二十年の今日まで猶其愛を忘れず、美徳璃が死際まで古宮の事を言續けし事などを思出し、其靈魂は定めし彼の古宮に歸りしならんなど思ひ、其身も古宮に行きて暮さんかと言出る事も度々なれど、死したる妻の事を何時までも慕ひては徒らに心を悩すのみなれば、面影を思出させる彼の古宮は、妻の事と共に

忘るゝに如じなど、諫むる者左右に有り、其意を果し得ざりしも、猶ほ未練の消盡さず、屢々
韋倫の父團墩に、其彩色を頼み居たるが、此度初めて其思ひを達したるなり、畫工團墩が
行きてより半年ほどの間に、幾度も手紙にて何處の壁は如何にせん、孰れの室には何を畫
かんなど問ひ來り、一々其差圖を送り居たるも、追々彩色も拂りたりとの知せを得て、公
爵は古宮の懐しさに堪へず、仕上の前には非親しく檢分せんとの口實にて、伊國へ旅行す
る事と爲り、二三の心利たる供を連れ、愈々英國を立出しが、心は古宮に在らずして誰だ一種
の妄想に在り、古宮の美しき景色の中に、亡き妻の美德璃が定めし我を待てるならんなど
思ひ、夢の如き心地にて伊國へは着きたるが、馬車を古宮の門に駐め、歩して其庭に進み
入るに、不思議や短き生牆の疎なる彼方に佇立み、曾て我が初て其の處に美德璃を見初
めたる時と殆ど同じ姿にて、同じ美德璃と思はるゝ一婦人彼方を向きて立てり、後姿の事

とて其顔は分らねど、肩より腰に至るまで美德璃ならずば誰か又斯まで優なるを得んと、
公爵は唯だ恍惚とし、是れ夢か、是れ現なるかを知らず、我を忘れて口を開き、
「オ、美德璃、美德璃」
と呼びたり。

公爵は、

「美德璃、美德璃」

と自ら呼ぶ我聲の、我唇頭を離るゝと共に、早や我身が妄想に浮されしを知り、死したる
美德璃が茲に徘徊する筈なきを知りたり、去れど其聲は消すに由なく、佇立める婦人の耳

に入りしか、婦人は怪む如く此方に向きたり、公爵は其顔を見るに是れ美徳璃には有らねども、美徳璃の上に幾倍も立優りたる美人にして、愛らしき其顔に、何と無く悲みの色を留るは、一入其美しさを深くするに足り、古宮を慕ひて悲みたる美徳璃の面影に似し如く思はるゝ所あり、其態度、其風姿は廣き歐洲の各朝廷を經廻りし公爵の目にすらも、今まで見し事無き氣高さにて、實に天女の降來せしかとも思はるゝ計りなれば、公爵は恍惚として眺め入るに、婦人も此立派なる人を何人かと怪みてか、公爵の身を見詰てあり、公爵は漸く我れに歸りて、先づ其帽子を脱ぎ、

「イヤ失禮を致しました、貴女を美徳璃などと呼掛て」

と疎忽を詫るに、婦人は此方を指して、優かに歩寄り、

「イエ私しこそ失禮を致しました、何人も入る事の出来ぬ此の表庭まで景色に見惚れて、

ツイ浮か〜と入込まして」

と云ふ、抑も此婦人は誰ぞ、是れなん彼の西富春人の血を見る敵、韋倫嬢なり。

公爵は猶ほ合點の行かぬ如く、

「貴女は何方です」

と最と恭々しく問ふは、昔し初て其妻美徳璃に逢ひたる時の様も斯ありしかと疑はる。韋倫は固より公爵の茲に來らんとすることを知らず、此立派なる紳士が公爵なりとは猶更ら知らねど、供人を引連れて入慣れたる場所に入る如く、最落着て濁歩する様を見て尋常人ならじと思ひ、必定此屋敷に就て何様かの力を持ち、此屋敷に入込む者を咎める丈の身分有る人と見たれば、

「ハイ私しは畫工團墩の娘、韋倫と申す者です」

公爵は又驚き、

「オヤ爾ですか」

と云ながら手を差伸べ、

「紹介人の無い場合ゆゑ自分で紹介しますが、私は五田公爵です」

と名乗り。通例の少女ならんには不意に公爵の名を聞きて、見苦しきほど驚き慌て、アタフタ態度を失ふ可きに、韋倫は少しも騒がず、唯だ穩かに其首を垂れて答禮の意を表せしは、家庭の仕附行届きて貴人に接する作法に充分慣れし者かと思はるゝにぞ、公爵は益々感じ、

「團墩氏までは、私しが茲へ来る事を知せて置ましたが、氏は貴女に其事を話ませんか」
韋倫は微なる笑を浮め、

「イエ父は唯だ美術の外は少しも浮世の話をせず、未だ貴方がお出の事さへ一言も私しへは申しません」

「成る程爾です、夫だから其道の大家に成れたのです」

と云ひ更に思ひ出せし如く、

「爾々、先日團墩氏は娘と一緒に此地へ来ると私しの許へ言て来ましたが、其娘と云ふが貴女の事だつたと見えますな」

「ハイ私しが唯だ父の一人嬢です」

是だけに一通の挨拶は済みたるも、公爵は猶ほ去るに忍びざる様子あり、

「折角土地へ入しつても、定めし番人共が不行届で御不自由がちで有ただらうと思ひますが、私しが来ましたからは成る可く其様な事の無い様に致させます」

「イエ最、立派なお屋敷で父も喜んで居りますし、私も此上ない保養を致しました」
「大抵此土地の名所古跡は巡覽に成りましたか、羅馬と云ふ所は殊に古跡の多い所ですが」
「イエ父は一日室の中へ据つたばかりで外へ出ませず、私しとてもお庭内の景色が見盡されぬ程有ますから、未だ外までは参りません」

「イヤ私しが來ましたから團墩氏及び、貴女と御一緒に緩々方々を見物しませう」
以外に親切なる言葉を聞き、韋倫は唯だ我身親子が、此の有力なる公爵に嫌れぬを喜ぶのみ、其上に何の望みも何の思案も無し、公爵は又、何とやら韋倫を亡き妻美徳璃の再來かと思はるゝ氣のせられ、韋倫と美徳璃との間に一種の縁の結ばれる所あるにやと怪み、心の中に韋倫と美徳璃とを別々に引分け得ず、

「イヤ茲で斯して貴女に逢たは何よりの幸ひです、實は私しが美徳璃くくと貴女を呼びま

したが、定めし貴女は其聲を聞たでせう」

「ハイ何だか聞いた様に思ひました」

「美徳璃と云ふは、十數年前に亡なつた私しの妻の名です、最う一昔しの事ですが、私が初て美徳璃を見ました時、丁度今の貴女のように、美徳璃が此庭の景色を眺めながら立て居ました、久し振に茲へ來て貴女の姿を見ましたから、フト美徳璃では無いかと思ひ、我を忘れて聲を掛けたのです」

と云ひ打笑ふに、韋倫は早くも不幸なる我身に引較べ、死して後まで其所天に慕はるゝ美徳璃の如き女も有れば、生て所天に欺かれ、所天に非ず、妻に非ず、恨み怨みて生涯を復讐に費さんとする我身の如き者も有り、同じ女にして何等の違ひぞと、知らず識らず心に浮び、涙の催さんとするを覺えたれど、漸くにして堰留めたり。

是よりして五田公爵は、韋倫を愛すること一方ならず、全く美德の再生とも思ひし如く、父と二人を馬車に載せ、毎日の如く名所古跡の見物に行き、殆ど韋倫の傍を離ざる程なるにぞ、同地に在留する英人の團體は怪みて、様々の噂を立て、彼の美人何者ぞと私に探るも有たれど、固より未だ人に知るゝ如き地位に立たず、噂の種を播きし事なき韋倫なれば、探りて知れやう筈も無く、果は愈々天降りし神女なるに相違なしなど評し合はしとぞ。

公爵は是ほどに熱心なれば、韋倫は公爵が我身を妻の如く愛するとは夢にも思はず、唯だ他國に出て外に氣の合ふ知人の無きが爲め、同國人の好みを以て親切を盡し呉る者とのみ思ひ、其恩に感じ居たるに、頓て一月も経ちし頃、公爵は或夜韋倫が庭に出で、月に輝

く噴水など眺めながら我が復讐は何の時に因果し得るやなど、留度も無く思煩ふ所へ出來り、韋倫を腰掛臺に座さしめて、最と熱心なる口調にて、我が爲に二度目の妻となれと言出たれば、韋倫は只管に呆れ果て、我身は既に心に愛と云ふ者消盡し、残るは復讐の一念にて、復讐の萌出る事無らんと思はるゝ程なるに、其復讐の緒口さへ得ぬうちに、如何にして人の妻たらんやと思ひ、明かに斷らんとするに、韋倫が口を開かぬうち公爵は早や其の顔色にて、我が願ひの斥けられんとするを知り、

「イヤ團墩嬢最う何にも仰有るな、貴女の口から否と云ふ一語が出れば私しは死で仕舞ひます、此世の望みは盡果てます、否でも否と云ふ事を言はず、黙ッて私しの言葉を仕舞ひまで聞て下さい」

と云ひ、迷惑けに黙つて控ゆる嬢に向ひ、切なる心の有たけを打明て、

「イヤ貴女と私と親子ほど年の違ふは能く知て居ます、當年四十八にもなる男が、廿歳に足るか足らずの女を妻にするとは、驚くも尤もですけれど、世間に例しの無い事では無く、充分貴方の生涯の幸福が圖れると思ふから云ふのです、五田公爵夫人と云へば、女皇の外には上に立つ者として無く、貴族社會の第一位です、英國第一の古城と云ふ、サクソン宮も貴女の物、五田家に屬する諸所の領地も皆貴女の領地、數へ盡されぬ程の富も有り寶も有り、貴族社會交際社會は皆貴女の足許に俯伏します、貴女の器量に公爵夫人の名を加へ、夫に限無き富を以て飾る時には、貴女は此世に於て女と云ふ者の出世の極度まで達します、何うしても私しを愛する事が出来ず、私しと一緒に居られぬと云ふならば兎も角も左も無ければ此上に何の望みが有て、私しの妻に成れ無いと仰有います、最初の妻に分れてから二十年も獨身を守り、有りと所在ゆる女を見て、一度も心を動かした事の無い私し

が、身分も忘れ世界も忘れ是ほどまでに願ふのに、何で貴女は五田公爵夫人と爲られませぬ、とて、恨むが如く訴ふる其真心を察しては、何處の婦人も心を動さぬは莫からんと思はるるに、韋倫が心は猶動かぬにや、彼れ宛も女皇の如き一轉の目配にて公爵を制し留たれば、公爵は又一入心配氣に、

「イヤ貴女が私しを斷らうと仕て居る事は能く分つて居ますが、其斷りを云ふ前に少しの間、私しの今まで言た事を味ひ、能つく利害を考へて下さい、私しの言ふ事には一點も飾は無く、皆な心の誠ですから」

と云ふに、韋倫は猶ほ聞かず、

「イエ爾まで仰有て下さる者を、身に餘る仕合せと思はぬ女は本統に罰が當ります、貴方